山辺町埋蔵文化財調査報告書 第4集

K-804

塚田遺跡

発掘調査報告書

1994.3

山辺町教育委員会

山辺町埋蔵文化財調査報告書 第4集

塚田遺跡

発掘調査報告書

1994.3

山辺町教育委員会

塚田遺跡発掘調査報告書正誤表

P	行	誤	正
1	２２	県道山辺～中山線	国道４５８号線
4	6	この東にひろがる	この西にひろがる
	１２	いまの県道	いまの国道
7	9	１１３６番地の１	削　　除
	１０	遺跡のすぐ東を県道平塩・山辺線が通り、さらにその東側にはＪＲ左沢線が通っている。	遺跡のすぐ西を国道４５８号線が通り、また東側にはＪＲ左沢線が通っている。
	１１	また西側の山ぎわにそって国道４５８号線が走っている。	削　　除
１３	第１表	NO.18 遺跡番号389 普光寺境内経塚	NO.18 遺跡番号389 普広寺境内経塚
４６	5	２．塚田遺跡近景（南東側より）	２．塚田遺跡近景（西南側より）

序

本報告書は、山辺町教育委員会が実施した「塚田遺跡」の調査成果をまとめたものであります。

今回の調査は、大寺小学校移転改築計画区域が埋蔵文化財包蔵地として、山形県教育委員会編の「山形県遺跡地図」の中に記載されていることから緊急調査を実施することになったものであります。塚田遺跡は、国道458号線と主要地方道山形朝日線（県道18号線）が交わる交差点北部に位置し、西部山麓をめぐる東側緩斜面に立地し、付近には日本海側最北限の前方後円墳がある坊主窪古墳群をはじめ、壇の山古墳群や集落跡の新館遺跡など古代からの遺跡が点在する地域であります。

調査の結果は、須恵器、土師系土器、土師器や内黒土師器等が多数出土し、更に珠洲焼や青磁も出土していることから平安から中世にかけての集落跡とおもわれ、当時の生活を知る事のできる重要な遺跡と言えます。

また、今回確認された貴重な遺産は山辺町の歴史に新たな史実が明らかにされたものと思われます。

最後に、本調査の責任者として指導に当たられました川崎利夫先生を始め関係各位に心から感謝申し上げ、報告書発刊の挨拶と致します。

平成６年３月

山辺町教育委員会
教育長　蜂　谷　四　郎

例　　言

1．本報告書は、山辺町立大寺小学校の新築移転工事に係る緊急発掘調査として山辺町教育委員会が実施した塚田遺跡発掘調査報告書である。

2．発掘調査期間は平成５年９月24日より10月31日までの実働20日間である。

3．本調査以前に６月14日より６月30日まで、山辺町郷土史研究会の協力により確認のために試掘調査を行っている。

4．調査にあたっては、地元大寺小学校ＰＴＡ及び後援会、㈱武田組、山辺町郷土史研究会から絶大な協力をいただいている。

5．発掘調査の組織体制は次の通りである。

調査団長　蜂谷四郎

主任調査員　川崎利夫
〃　茨木光裕

補助調査員　高橋玄寿
〃　鈴木利明
〃　工藤一夫
〃　村山賢司
〃　三浦浩人
〃　武田由美子

調査作業員（地元協力）
大寺小学校ＰＴＡ
大寺小学校教育後援会

事務局
教育次長　長岡茂樹
総務主査　渡辺秀彦
社会教育係長　渡辺直好
社会教育係　峰田順一
元木満
多田勇
多田テル代
吉田郁男

調査協力団体等

山辺町文化財調査委員会

山辺町郷土史研究会

株式会社　武田組

6．本報告書の本文執筆は、調査員の討議にもとづき主任調査員の川崎利夫・茨木光裕があたり、４のみ三浦浩人・村山賢司が分担した。遺物整理及び図版作成は、川崎利夫・茨木光裕・鈴木利明・工藤一夫・村山賢司・三浦浩人が共同で行い、写真撮影は主として川崎利夫が担当した。

7．発掘調査報告書は、記録保存という性格上専門用語を用い、一般には親しみにくいものになっているが、少しでも多くの方々から読んでもらうために、冒頭に「塚田遺跡のあらまし」を載せた。これによって調査の意義や性格のあらましがわかるよう配慮した。

8．本報告書の編集・統括は川崎利夫があたった。

目　　次

塚田遺跡のあらまし …… 1
1．はじめに …… 5
2．塚田遺跡の位置と地形 …… 7
3．塚田遺跡周辺の歴史的環境 …… 9
4．試掘調査について …… 13
5．発掘調査の目的と方法 …… 20
6．発見された遺構 …… 22
7．出土した遺物 …… 29
8．塚田遺跡における古代集落の様相 …… 39

挿　図　目　次

第1図　発掘作業状況 …… 5
第2図　現地説明会 …… 6
第3図　遺跡附近地形図 …… 7
第4図　調査前の遺跡の状況 …… 8
第5図　周辺の遺跡分布図 …… 10
第6図　坊主窪1号墳実測図 …… 11
第7図　新館遺跡の遺構全体図 …… 12
第8図　試掘地点図 …… 14
第9図　J´区遺構平面図 …… 16
第10図　J´区土層断面図 …… 16
第11図　試掘調査出土土器 (1) …… 17
第12図　試掘調査出土土器 (2) …… 18
第13図　塚田遺跡グリッド設定図 …… 21
第14図　塚田遺跡遺構全体図 …… 23
第15図　SB1、SB2、SB3建物跡平面図 …… 24
第16図　SB4、SB5、SB6建物跡平面図 …… 25
第17図　SK8平面図、断面図 …… 26
第18図　SK10、SK11、平面図・断面図 …… 27
第19図　須恵器実測図（蓋・坏・高台付坏） …… 30

第20図　須恵器実測図（蓋・高台付土埦・壺等）…… 31
第21図　須恵器の蓋・底部のろくろ切り離し痕拓影 …… 32
第22図　須恵器壺・甕などの外内面拓影 …… 33
第23図　土師系土器甕実測図 …… 35
第24図　墨書土器 …… 36
第25図　須恵器系中世陶器の拓影 …… 37
第26図　塚田遺跡復元想像図 …… 43

図　版　目　次

1　(1)　塚田遺跡を東側から望む …… 46
　(2)　塚田遺跡近景（南東側より） …… 46
2　試掘調査出土土器　(1) …… 47
3　試掘調査出土土器　(2) …… 48
4　試掘調査出土土器　(3) …… 49
5　試掘調査出土土器　(4) …… 50
6　(1)　ＳＢ６建物跡 …… 51
　(2)　ＳＢ４建物跡 …… 51
7　(1)　建物跡（ＳＢ１、ＳＢ２、ＳＢ３） …… 52
　(2)　細長いくぼみの跡（ＳＢ３の南側） …… 52
8　(1)　ＳＢ６のＥＢ１の柱穴 …… 53
　(2)　ＳＢ６のＥＢ２の柱穴 …… 53
9　掘立柱柱痕（ＲＷ１） …… 54
10　(1)　土壙ＳＫ10 …… 55
　(2)　土壙ＳＫ11 …… 55
11　(1)　土壙ＳＫ10、ＳＫ11 …… 56
　土壙ＳＫ18 …… 56
12　(1)　土壙ＳＫ15 …… 57
　(2)　土壙ＳＫ８ …… 57
13　墨書土器 …… 58
14　須恵器坏 …… 59
15　須恵器破片１ …… 60
　(1)　蓋のつまみ …… 60

(2) 高台坏底部 …… 60
16 須恵器破片 2 …… 61
(1) 口縁部 …… 61
(2) 底部 …… 61
17 須恵器壺・甕破片 …… 62
18 土師系土器 1 …… 63
(1) 壺 …… 63
(2) 堝の把手部 …… 63
19 土師系土器 2 …… 64
(1) 甕形土器 …… 64
(2) 破片 …… 64
20 須恵器系中世陶器片 …… 65
21 (1) 上 石器 下 陶磁器片 …… 66
(2) 古銭 …… 66
(3) 木片 …… 66
(4) 木柱痕 …… 66

塚田遺跡のあらまし

塚田遺跡の発掘調査のあらましを
わかりやすくまとめたものである。

1．なぜ発掘調査を行ったか

地下に埋もれている埋蔵文化財は国民みんなのだいじなたからです。これらをしらべることによって、わたしたちの祖先のくらしのようすがわかります。いまのくらしや社会があるのも、古い昔からの人々のいとなみの上に成り立っているのです。それによって、現代のいき方や方向を反省し、よりよい未来をつくっていく基礎にもなるのです。

国には「文化財保護法」という法律があって、埋蔵文化財が土木工事などによって壊されるおそれがあるときに、その前に発掘調査を行って、だいじな遺跡が発見された場合には保存したり、記録に残して後の世に伝えることがきめられています。

塚田遺跡のあたりに大寺小学校が新しく建設されることになったので、山辺町教育委員会では遺跡がほんとうに残っているかどうかを調べました。その結果平安時代の集落跡のあることがはっきり確かめられたので、調査団をつくり、昨年９月下旬から１か月あまりかけて発掘調査を行いました。これには地元の大寺地区の方々や山辺町郷土史研究会の方々などおおぜいの人たちの協力がありました。発掘が終っても、出てきた遺物を整理し図面を書き、報告書にまとめるのは大変な仕事で、３か月かかってようやくこの報告書が完成しました。図や写真を参考にしながら、興味があったらぜひさいごの方まで読んでください。

2．塚田遺跡はどんなところにあるか

この遺跡は、山辺町大字大寺字竹の花というところにあり、県道山辺～中山線の東側の水田や果樹園になっています。西側から張りだした白鷹丘陵のすそ野が平野部にむかってのびる台地は、山の方から流れおちる小さな沢や谷によって刻まれています。水にめぐまれ、水田を東側まじかに望み、後ろに山地をひかえた台地上に古代のムラがありました。

塚田遺跡の北には、良実塚（よしざねづか）・新館（しんたて）・前田などの遺跡があり、古代のムラがあったことを示しています。新館遺跡は、道路工事にかかるために1987年に県教育委員会によって発掘調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡や建物跡が見つかりました。またこれらの東側の平地部には、きちんとくぎられた条里制（じょうりせい）といわれる古代の水田がひろがっていたと考えられます。

西側の丘陵には、６世紀に築かれた古墳群があり、そのなかの坊主窪（ぼうずくぼ）１号墳は日本でもっとも北にある前方後円墳として知られています。このあたり一帯は、かなり古い時代からひとびとが住みつき開発がおこなわれていたことがわかります。（第５図）

３．この遺跡からは何がでてきたか　（第14～18図）

新しくたてられる学校の敷地は18,000㎡ですが、遺跡の広さもそれぐらいあるのでしょう。しかし一段低い方の東側は盛り土されて遺跡が壊されないので、掘りかえされけずりとられる西側の約 4,000㎡の調査をすることになりました。

重機で全部にわたり20㎝ほど表面の土をとりのぞくと、粘土質の黄色味がかった土があらわれます。ところどころこの土に黒土が入りこんだ大小の穴のあとがたくさん出てきて、土器のかけらもちらばって発見されました。それらをていねいに掘り出して写真をとり記録していきます。直径２～30㎝のまるい小さな穴は、柱を埋めこんだ穴で、 1.6～ 1.8mくらいの間かくで規則正しく並んでいます。柱は朽ちて残らないのが普通ですが、柱の根もとだけのこっている場合もあります。遺跡の北側にあるように柱あなが東西にそれぞれむきあって４個、南北に３個ずつ並んでいるのは東西３間、南北２間の住居の跡です。寺や役所のほかは土台石を使わない、掘っ立て柱のすまいでした。（第14図）

長辺が桁行（けたゆき）、短辺を梁間（はりま）といい、地面を平らにして山から切り出してきた柱を埋めて立て、その上に貫（ぬき）をわたして屋根をかけたようです。屋根は草ぶきかかやぶきで、壁は板材をつかっていたのでしょう。なかは土間で、その一部はわらの上にむしろなどをしいて寝所にしていたものとおもわれます。それらの様子は、当時えがかれた絵巻物や実際でてきた住居などから推定されます。

遺跡の北側にこのような住居がありますが、そのすぐ西側に一本柱の４個の柱あなが梁間に平行して並んでいます。これはどうも板塀（いたべい）だったようです。これらを母屋（おもや）とすると、その南側に２間×２間の総柱（そうばしら）（内側にも柱があるもの）の建物がありますが、ふつうのすまいにしては柱が邪魔になりますから方形のプランからしても倉庫と考えられます。

この倉庫の右手（東側）には、２つの土こうが並んでいます。直径２m近い深さ30㎝ぐらいの穴ですが、ここからは完全な土器も含めたくさんの土器がでてきました。ごみすて穴、墓穴、トイレ、また特別の儀式やまじないなどのために掘り込んだ穴で、土こうとよんでいます。このような土こうが13ぐらい発見されました。ごみすての穴は、いろいろなものがでてくるので、考古学者にとってはだいじな遺跡

です。（第17～18図）

北側の建物群に対してその南からも２間四方の建物とそれよりやや小さい同じ２間の建物がくっついて出てきて、それとかさなる２間の建物も確かめられました。母屋につづく納屋のように考えられ、それと重なる北側の建物は、前の住居や納屋が廃屋になってからたてられた新しい住居のようです。（第15図）

こうして塚田遺跡では、６棟の掘っ立て柱建物跡とそれらと関連する「土こう」や溝跡・約50の柱穴がみつかり、当時のムラのありかたをかんがえる上で大変参考になります。

４．どんな遺物がでてきたか　（第19～25図）

ここからは完全な土器も含めて約1000点の土器が掘り出されました。そのなかでもっとも多いのは須恵器といわれるろくろを使って形を作り、「あな窯」で焼いたねずみ色や灰白色のかたい土器です。「つき」といわれる食器が多く、蓋や壷などもあります。黄褐色をした土器は、「土師系土器」といい、主として煮炊き用のなべ・かめ、わんなどにもちいられ、当時の生活のようすを知る資料です。

とくに注目されるのは、須恵器の底に墨書きで文字を記したものが７点みつかっていることです。北側の大きな建物の近くにある「土こう」から掘り出されたものが多く、「爪」や「水」と書かれたものがありますが、「爪」は「天」をあらわす文字のようで、まじないに使われたもののようです。順調な天候やゆたかな水を祈ってささげたものかもしれません。このムラにも文字を書ける人がいたことを示しています。

そのほか縄文時代の石器やこのムラがなくなってからの鎌倉時代のころに使われた土器や江戸時代の瀬戸物も見つかりました。

５．平安時代のムラのようすはどのようであったか　（Ｐ43のイラスト）

発見された建物跡や土器の特徴などから、ここには平安時代後期のムラの一部があり、倉庫や納屋をともなう農民の家があったことがわかりました。遺跡の東側や南と北側に小さな沢がめぐっている台地です。このたびの発掘によってわかったのは２～３軒の住まいがあったということですが、もう少しあったのかもしれません。それに盛土が行われる一段さがった東側の広い台地にも数軒のすまいや作業小屋・倉庫があったことは確実です。

いまは畑や水田をつくるとき、小さな沢を埋め込んで広い平らな土地に変えていますが、そのころは自然の地形を利用していました。このたびの調査で、ここが東

から南にかけて小さな谷によって囲まれた地形であったこともわかりました。遺跡の西南の今の家のちかくに自然に水がわきだす泉もあったようです。瓶をかかえて、ここに水をくみにくる少女たちの姿が浮かんでくるようです。

わたしたちは、発掘調査の結果から、いまから1000年前の11世紀の前半、ここに数十年にわたってひとびとが住みついたムラの一部だと考えています。そのころは、「出羽国最上郡山辺郷」といわれ、ひとびとは須川からこの東にひろがるゆたかな水田を利用して米作りにいそしみ、その一部を国に税として納めていました。ときには国の役所からわりあてられて労役にでたり、兵士としてかりたてられることもありましたから、決してらくなくらしとはいえません。でもムラの神社の春秋のお祭りはだいじな行事でたのしみでもありました。家のまわりには畑もつくり、時には山へでかけて山菜をとったり、けものをつかまえることもありました。家の中ではは織りにいそしむ女たちの姿もありました。いまの県道とほぼおなじに山の下は南北に「山の辺の道」があって、旅人もきっと通り、道のほとりの泉のところにやすみながら、ムラの人々に遠い関東や都での出来事をつたえたのでしょう。

たぶん、大寺の集落が山ぎわに移ったのは、安国寺などがさかえる中世以降のようです。もともとはいま果樹地帯や水田になっている東側の谷にきざまれた台地上に点々と家があり、その上を「山の辺の道」が通っていたのでしょう。土器の分布や前田・新館・塚田と南北に並ぶ平安時代のムラの跡から、そのように考えられるのです。まだわかっていませんが、この遺跡の南側の台地にもムラの跡があったに違いありません。

このあたりは、ゆたかな須川流域の水田地帯をひかえ、1500年も前の古代から開発された場所であることは、古墳群が分布することでもわかります。それからひきつづき平安時代にも多くの集落がありました。その後、奥州藤原氏が勢力をのばす11世紀から12世紀には、京都の有力な貴族であった藤原忠実・頼長などの荘園である「大曽根庄」や「山辺庄」になり、それから天皇家領ともなっています。

ここに室町幕府が安国寺を置いたのも、古代からさかえたゆたかな地域であったからでしょう。その古代のようすを頭にえがきながら、1000年前の祖先のくらしぶりをたどってみようではありませんか。

1．はじめに

―― 発掘調査にいたる経過と本報告書ができるまで ――

塚田遺跡は、山形県東村山郡山辺町大字大寺字竹の花1148番地の１に所在する。1978年に山形県教育委員会において作成した「山形県埋蔵文化財包蔵地一覧」に遺跡番号353 で記載されている周知の遺跡である。

大寺の集落の南側高台にある山辺町立大寺小学校は、老朽化にともない新築移転することに決定し、平成５年度より着工することになっていた。集落の東に位置し、水田・畑地などに利用されているこの地に建設されることになったのである。

山辺町教育委員会では事前に試掘調査を行い、遺跡の性格・時期・発掘調査が必要かどうかを検討するために平成５年６月14日から30日まで要処々々にグリッドを設けて「坪掘り」を実施した。この試掘は、町職員で学芸員である武田由美子が指導にあたり、鈴木利明・三浦浩人・村山行宏らが山辺町郷土史研究会の協力をえて行った。この結果については後に述べる通りである。

まとまって遺物が出土する箇処や柱穴・土壙なども発見され、平安時代の集落跡であることが判明したので、山形県教育委員会文化課とも協議し、調査団を編成して本調査を実施することとなった。調査団の編成は別記の通りである。９月17日及び22日に町中央公民館において関係者が集い、調査団の結団、調査時期、調査方針、報告書作成等について細部にわたって協議を重ね９月20日より緊急発掘調査に入った。鍬入式は９月28日に行った（第１図）

遺跡の総面積は、18,000㎡に及ぶが、西から東へ傾斜する地形であるため校地敷地東半分は西から土砂を移動して盛土が行われることになる。昭和53年９月25日付の文化庁通知（「埋蔵文化財関係の事務処理の迅速適正化について」）により、遺構面に影響がない盛土の部分は調査から除外することにした。従って調査対象面積は 4,000㎡である。作業に当ったのは、地元大寺小学校後援会やＰＴＡの方々で、㈱武田組より重機を出していただき絶大な協力があった。

第１図　発掘作業状況

調査途中に降雨の日も多く、ようやく10月４日より精査に入り、10月28日にほぼ発掘調査を完了し、同日午後から地元の方々をはじめ大寺小学校児童ら 100名の参加をえて現地説明会を行った。（第２図）

その後、降雪前の12月上旬まで数回にわたって補足調査を行っている。そして今年に入って１月24日報告書作成の会議を開き、２月末日まで９回ほど集まり、遺物洗浄・分類整理・復元・図面作成・写真撮影などを行った。調査員の大方は日中それぞれの勤めをもっているので、夜間に教育委員会の一室を借りて作業にあたった。これまでの報告書にはなかった新機軸を出そうと意図したが、すでに遺構は雪の下に埋もれているので、もう一度確かめようと思っても不可能なこともあった。

こうして多くの方々の労苦の上に報告書は完成をみたが、記録保存の責をいささかでも果しえたのではないかと思う。また多くの方々から読んでいただくよう工夫した点も多々あり、わたしども調査団の意図をくんでいただければ幸いである。

第２図　現地説明会

2．塚田遺跡の位置と地形　（第３・４図）

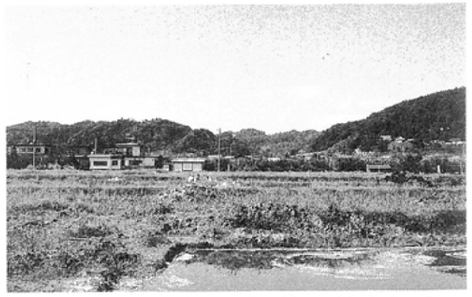
塚田遺跡は山形盆地の西端に位置し、盆地の西を限る白鷹山を主峰とし北に伸びる白鷹丘陵が盆地にむかってゆるやかに傾斜する面にある。奥羽山系に源をもつ馬見ヶ崎川や立谷川によって山形盆地東側は扇状地が形成されるが、その複合扇状地の間をぬうようにして、同じ奥羽山脈蔵王山に源を発する須川が斜めに盆地を横切り、山辺町のあたりで西側の白鷹丘陵に接近し、大きく屈曲して東に向きを変え、中山町の北で西から流下する最上川に合流する。塚田遺跡は須川の西約２kmのところにある。

行政的には山辺町大字大寺字竹の花1136番地の１となっており、町村合併前は東村山郡大寺村に属していた。遺跡のすぐ東を県道平塩・山辺線が通り、さらにその東側にはＪＲ左沢線が通っている。また西側の山ぎわにそって国道 458号線が走っている。

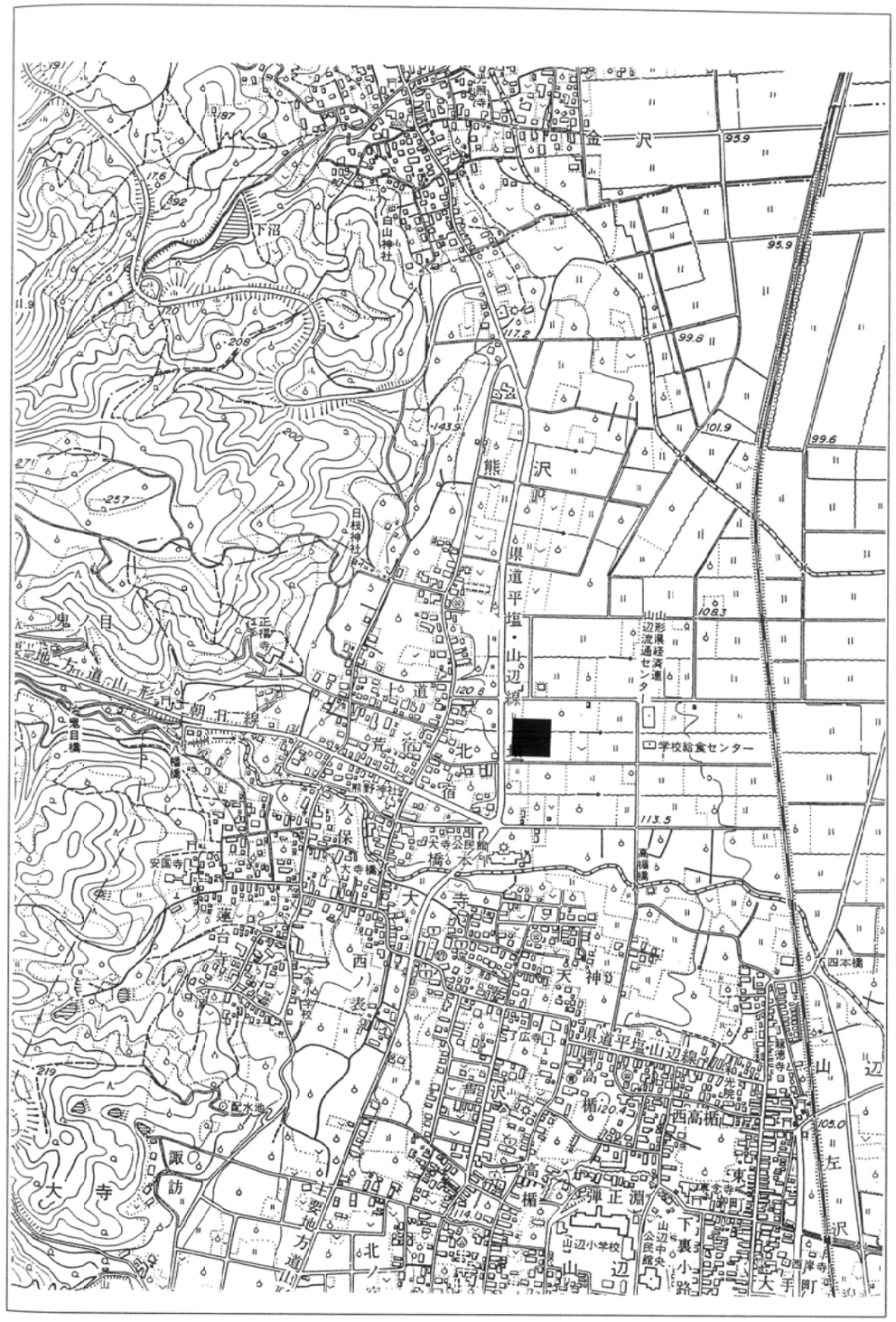
西側の山地部から東の平地部にむかってなだらかに傾斜する地形で、山形市西部から山辺町をへて中山町まで同じような地形がつづき、西の山地から流下する河川によって小扇状地や河岸段丘を形成する。塚田遺跡附近も流下する小河川によって傾斜面が区切られ、処々に独立した東に開く台地になっている。

遺跡附近も北側は小さな沢によって良実塚があったという台地とへだてられ、さらに遺跡を横切るように北から西南へむかって小さな沢が入り組む。従ってこの度調査した西側の箇処と平地にのぞむ東側の箇所の二区に分かれ、それぞれ独立した台地をなしていたことが調査の結果からも判明した。現地形からも段差によって推定できるが、1963～64年に行われた玉虫土地改良区による圃場整備事業によって沢が埋めたてられ、段差の少い平坦な地形に改変されている。すでに述べたように、東区は盛土がなされるために調査から除外し、西区の7500㎡を調査対象とし、4000㎡の精査を実施した。

なお標高は 110m前後である。



第３図　調査前の遺跡の状況（東方から）



第４図　遺跡附近地形図（1/10,000）　山辺町による

3．塚田遺跡周辺の歴史的環境（第５図及び第１表）

白鷹丘陵の裾野が平地にむかってのぞみ、谷や沢によって刻まれた台地上には古代集落が営まれた。塚田遺跡のすぐ北東の水田地帯には条里制があったことが、明治期の地籍図などから推定され（№10）(1)、さらにその北の中山町柳沢・金沢集落の東にも柳沢条里遺跡があり（№４）、1988年の県教委による発掘調査で、畦畔や溝跡・平安時代の・土器などが検出されている。(2)

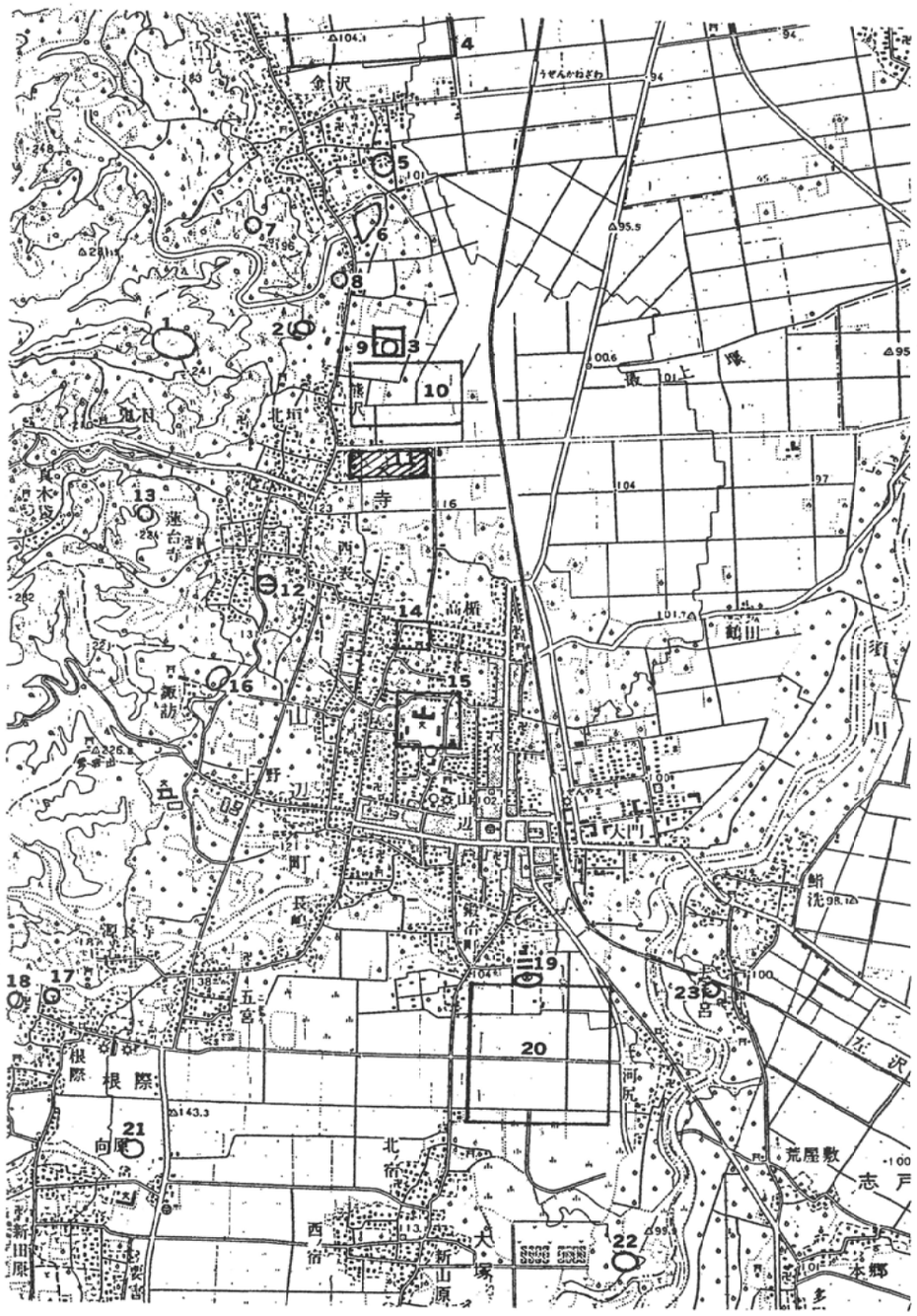
これらの条里遺構に関連すると考えられる平安期の集落跡が前田（№５）、良実塚（№３）、新館（№６）や本遺跡である。良実塚は、小野良実を葬った墓の伝承をもつ塚であり、1919年（大正８）の左沢線敷設工事の際土砂を採るために掘りかえした今は跡形もない。しかしここから出土したという鉄製直刀が熊沢の日枝神社に保存されており、いまは腐蝕折損してみるかげもないが、戦後まもなく輪郭をとった図面が残っている。これによると全長105.1 ㎝の大刀で、県下最大の鉄刀であり６世紀代の古墳から出土したものであることは疑いない。「良実塚」の墳型・規模など不明であるが古墳であることは確実である。この近くからも須恵器片などが出土することから古代の集落があったのであろう。またここには中世の方形館跡があったらしく濠跡があったと伝えられ、小野氏の屋敷跡の伝承もある。

さらに良実塚遺跡の北に位置する「新館遺跡」は、県道の改良工事に伴い1987年（昭和62）の秋に県教委によって一部発掘調査が行われた。（第７図）その結果、平安時代前期の竪穴住居跡１棟、掘立柱建物跡６棟、土壙や溝跡の他に柱穴多数が発見された。このなかには中世のものも含まれている。(3)

山辺本町の南部には山辺南部条里遺構があり（№20）圃場整備にともない1979年（昭和54）県教委によって発掘調査が行われた。水田の上に洪水などによってもたらされた砂が全面おおっていたので、水路・畦畔・水田の一部が良好な状態で検出された。水の取り入れ口附近からは、当時の人の足跡も発見され、出土した土器などからすでに奈良時代につくられた水田であることがわかり、「長地式」の区画を示す条里遺構として注目された。(4)

このように須川西域から白鷹丘陵にいたる間は、奈良時代や平安時代から開発が行われ、条里制にもとづく水田農業が定着し、それに従事する農村集落が台地や段丘上に成立したことが明らかである。

その前提をなす基盤は、すでに前代からあったことが最近明白になってきた。この塚田遺跡の西側の丘陵地帯には数十基の古墳が群集する「坊主窪・壇の山古墳群」が存在するのである（№１）。この中の坊主窪１号墳は1986年（昭和61）山辺町教



第５図　周辺の遺跡分布図（国土地理院1/25,000）

育委員会が主体となって予備調査を行ったが、まさしく全長27.5mの周濠をともなう前方後円墳であり、最北限の前方後円墳として注目された(第6図)(5)。同じく山辺町の南部には箱式石棺を主体とする根際古墳群や去手路古墳群（No.23）が分布し、須川の段丘には4世紀代に営まれて古式土師器を出土した「大塚遺跡」があり、（No.22）1960年に小発掘が行われている。また初期の農業に関連するものとして「蓮台寺」（No.12）「庚申山」（No.7）などから弥生土器が発見され、2000年前の米つくりが開始されるもっとも最初の集落があったらしいがその実態はまだよくわかっていない。

このような古代からの豊かな生産力を背景にして、玉虫沼周辺には古代窯業地が生まれ(6)、「山辺郷」から「山辺荘」へと発展をみせ、「安国寺」「普光寺」など古代にさかのぼる仏教文化も栄えたのであった。安国寺は室町幕府によって諸国に設けられたが、夢窓疎石の開山と伝えられる名刹である。しかしそれ以前に真言寺院がすでにあったといわれている。

塚田遺跡も今日の山辺町に遠くつながるいまの地域のいしずえとなった古代のムラであった。

〔註〕

(1) 柏倉亮吉「条里のあと」（「古代の日本8東北」角川書店）1970年。

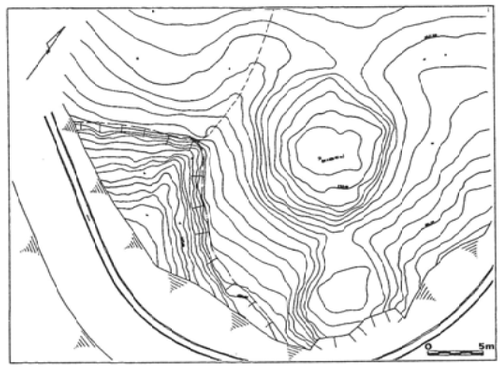
(2) 山形県教育委員会「柳沢条里遺跡第1次発掘調査報告書」1989年。

(3) 山形県教育委員会「新館遺跡発掘調査報告書」1988年。

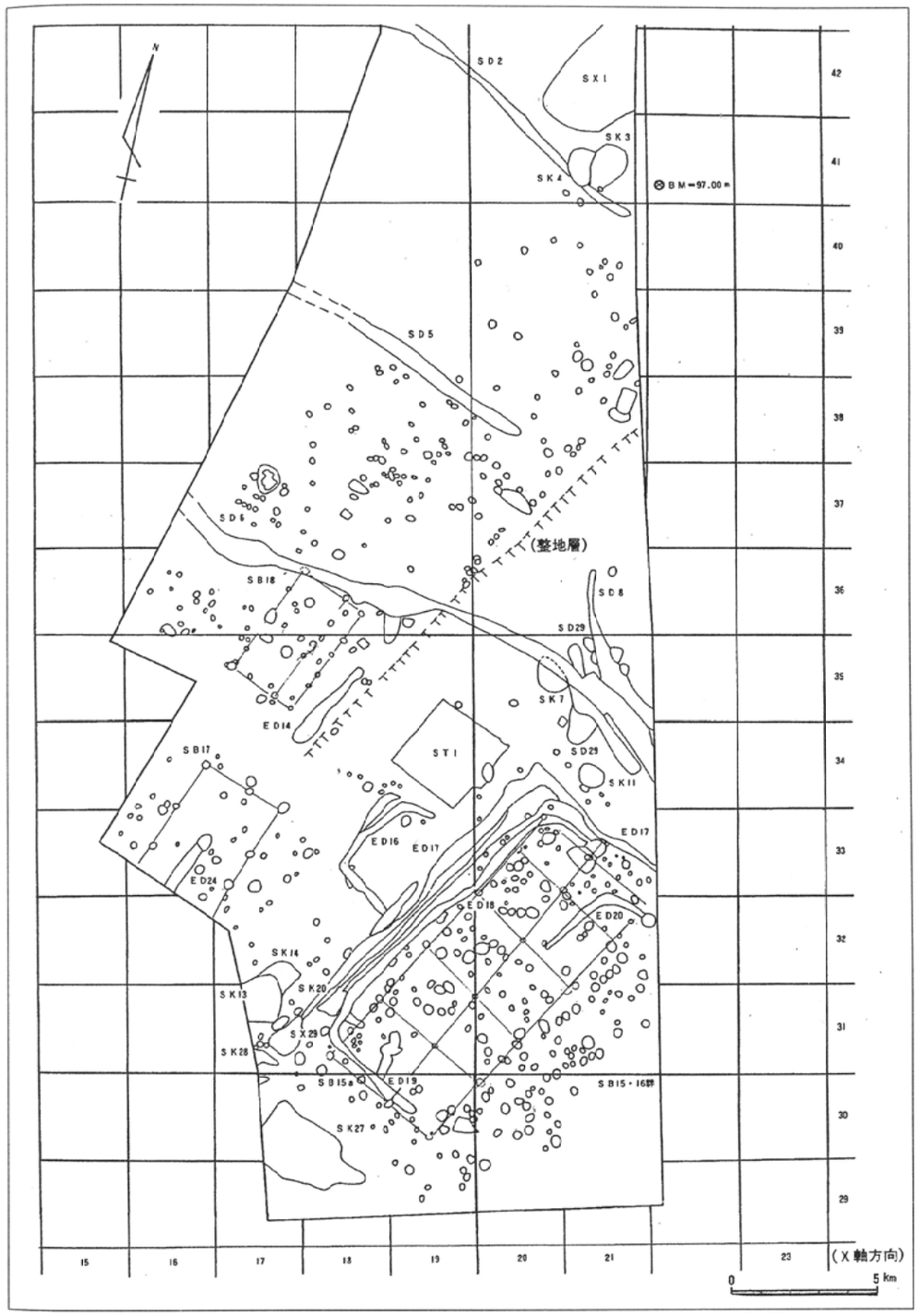
(4) 山形県教育委員会「山辺条里遺跡発掘調査報告書」1979年。

(5) 山辺町教育委員会・坊主窪古墳群調査団「坊主窪1号墳予備調査報告書」（山辺町埋蔵文化財調査報告書第2集）1989年。

(6) 山辺町教育委員会「玉虫沼1号窯跡発掘調査報告書」（山辺町埋蔵文化財調査報告書第1集）1989年。



第6図　坊主窪1号墳実測図



第7図　新館遺跡の遺構全体図
（1988—県教委同遺跡発掘調査報告書による）

第１表　周辺の主要遺跡地名表

No.	遺跡番号	遺　跡　名	時　　期	No.	遺跡番号	遺　跡　名	時　　期
1	351	坊主窪古墳群	古　墳	13	349	安国寺経塚	平　安
2	350	壇の山古墳群	古　墳	14	346	高楯城跡	中　世
3	354	良実塚	古　墳	15	345	山野辺城跡	中世～近世
4	405	柳沢条里	平　安	16	348	諏訪原	平安～中世
5	404	前　田	平　安	17	388	根際的場	縄　文
6	355	新　館	平　安	18	389	普光寺境内経塚	近　世
7	403	庚甲山	弥　生	19	395	一本杉	奈　良
8	352	西光寺山館跡	中　世	20	394	山辺南部条里	奈良～平安
9	新規	新館	中　世	21	391	原	縄　文
10	356	山辺北部条里	奈良～平安	22	393	大　塚	古　墳
11	353	塚　田	平　安	23	127	去手路古墳群	古　墳
12	349	蓮台寺	弥　生				

（注）１．No.は第５図分布図に対応する。
２．遺跡番号は「山形県埋蔵文化財包蔵地一覧」（1978－県教委）の一連番号である。

第１表　周辺の主要遺跡地名表

４．試掘調査について

(1)　試掘調査の概要

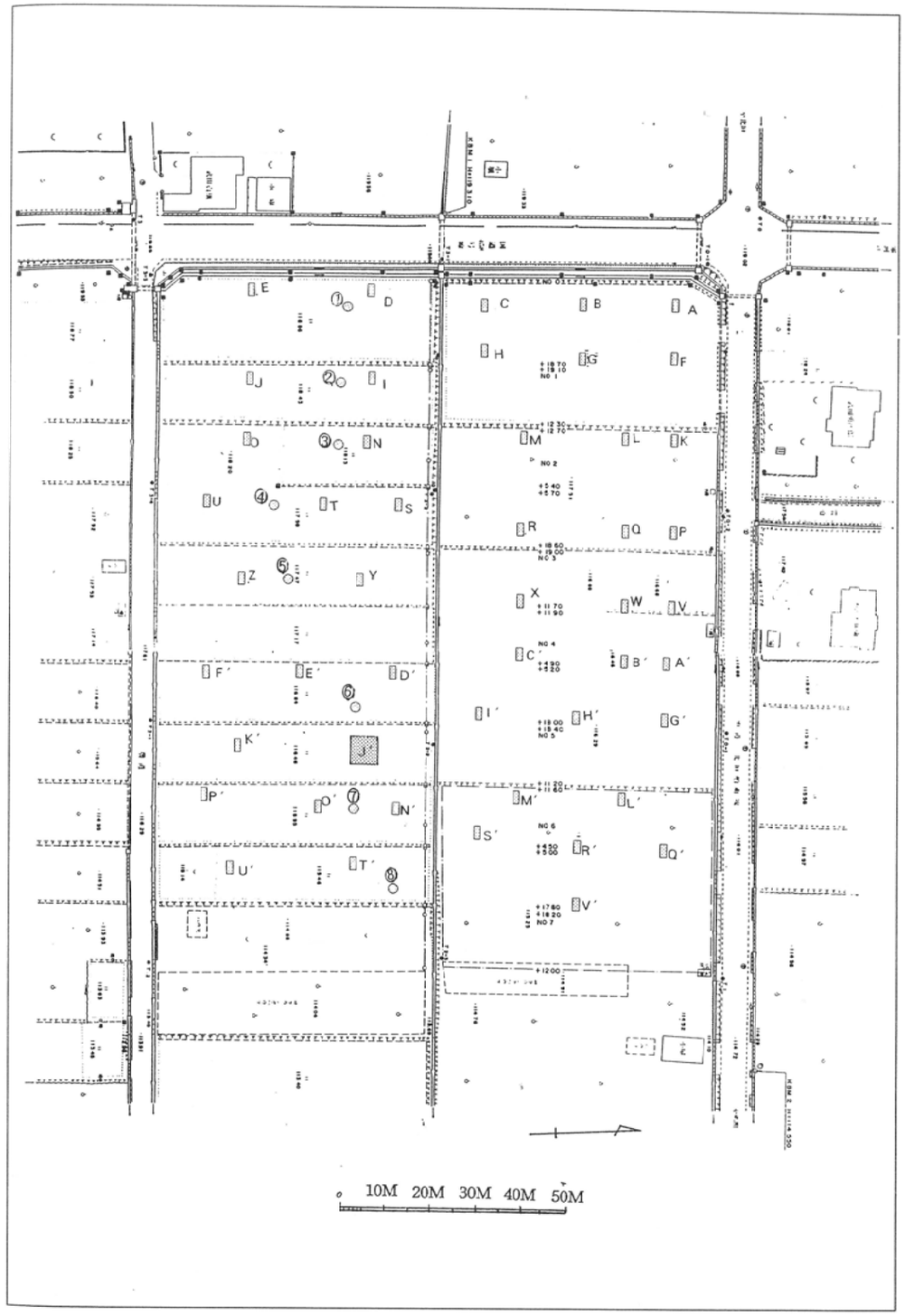
塚田遺跡については山形県教育委員会編の「山形県遺跡地図」（1978刊）に遺跡番号353・奈良から平安の集落跡として報告されている。

同区域は、1963年から64年に玉虫土地改良区が事業主体となって圃場整備事業が施工された。その際に西から東にかけて傾斜があったものを、段差のあまり感じられない水田として整備したため、盛土や削平が大規模に行われ、塚田遺跡は相当攪乱されている可能性があると考えられていた。

今回、大寺小学校の移転計画区域に同遺跡がかかることから、その範囲と状況を確認することを目的として、６月14日から６月30日にかけて、山辺町郷土史研究会と株式会社武田組の協力をえて試掘調査を実施したわけである。

調査は、18,000㎡の予定区域内に対し、2m×5mを単位とするＡ区からＶ´区まで48箇所の試掘区を設定し、重機（バックホー）により30㎝から３ｍまで土層に応じて掘り下げた。（第８図）

なお、遺構の範囲を明確にするため、さらに重機（バックホー）によるバケット幅による坪掘を８箇所（①区～⑧区）おこなった。



第８図　試掘地点図

地点	出土物（数字は土器の点数）		遺構等
A	須恵器１（甕・内面同心円文）	土師系土器１	
J	須恵器４	珠洲焼３（甕）	
	土師系土器４	近世の陶器２	
I	須恵器１（高台坏）	不明２	
②	須恵器１（蓋）		柱穴１性格不明の落ち込み
N	須恵器５（蓋１・甕２）	土師系土器１	柱穴２
O	須恵器３（高台坏1・蓋1・内面櫛様文1）	珠洲焼１	柱穴１
S	須恵器７（坏２・蓋１） 土師系土器１	不明１	
T	須恵器14（坏４） 金属片１	土師系土器16	
U	須恵器５（坏３・蓋２）	土師系土器３（坏１）	
Y	須恵器11（坏など）	赤焼土器１	
Z	須恵器２（坏）	土師系土器２	
⑥	須恵器１（甕）	土師系土器１	
E′	須恵器２	土師系土器２	
J′	須恵器19（墨書高台坏１・坏４・高台坏６） 土師系土器56（坏・内黒土師器２） 青白磁１ 近世陶器１　不明３		柱穴、ピット・土壙 性格不明の落ち込み など30ケ所を数える
K′	須恵器５（坏１・高台坏１・蓋１）	土師系土器１　不明２	
N′	須恵器４（坏）	土師系土器16（鉢・坏）	
⑦	須恵器15（坏１・高台坏１・蓋１） 土師系土器37（小型鉢１）		
O′	須恵機５ 青磁２　近世２	土師系土器16(黒色土器1・鉢1)	
T′	須恵器２		
U′	須恵器３（坏１・甕１・蓋１）	不明２	溝状遺構１
出土地点不明	須恵器２　土師系土器１　不明２		

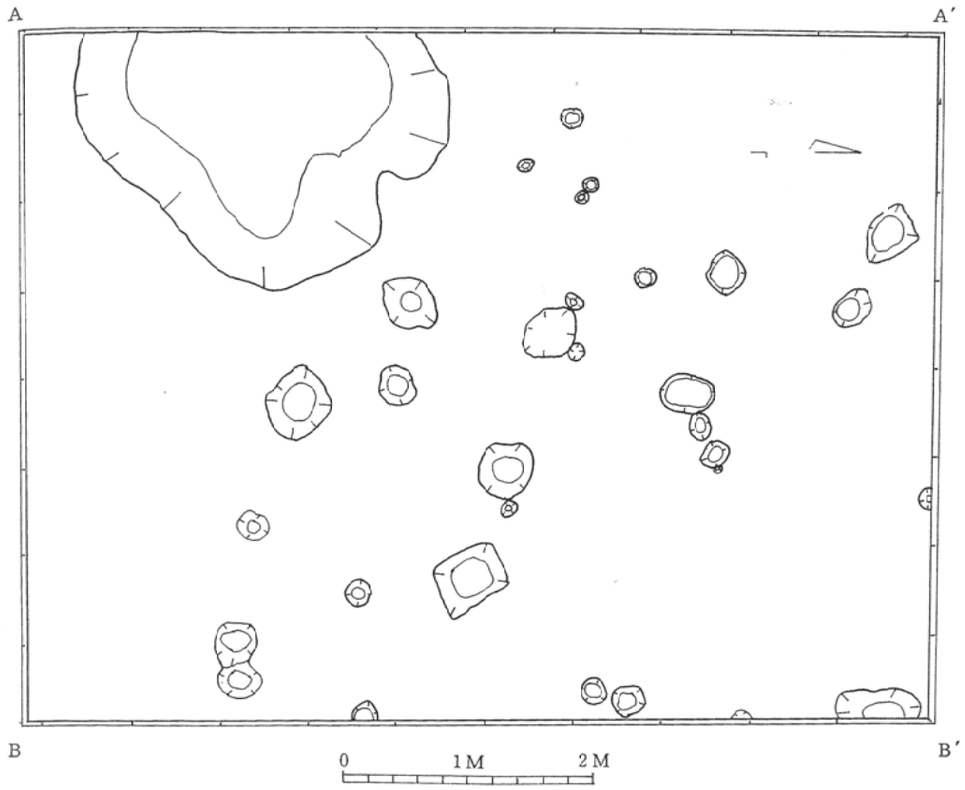
第２表　塚田遺跡試掘調査状況

(2)　試掘調査の結果

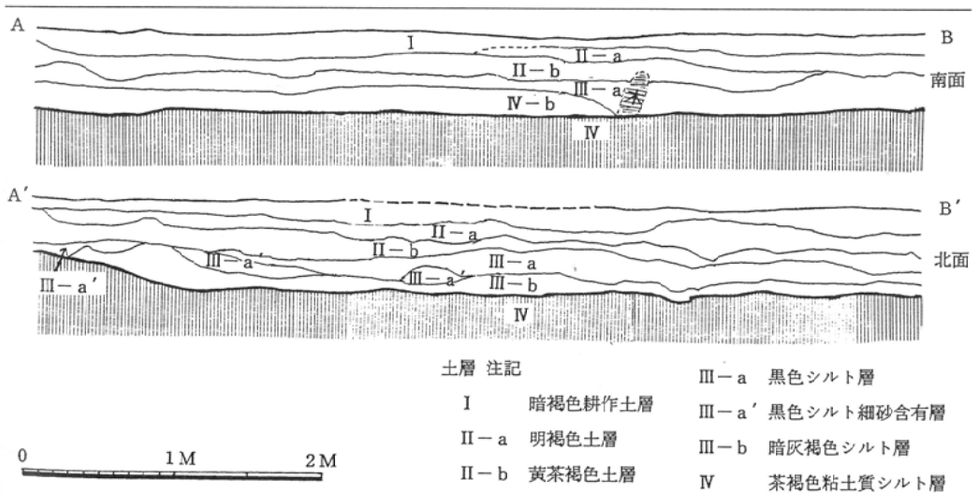
20の区から約280点の遺物が出土した。もっとも出土数の多いものは、須恵器であり、土師器系土器（赤焼土器・土師器・内黒土師器・黒色土器）がこれにつづき、中世の珠洲焼や青白磁のほか金属片もみられた。器種は坏がほとんどで、蓋や甕・小型鉢なども若干出土している。

遺構については、５の区から、柱穴やピット・土壙などのほか、溝状遺構や性格不明の落ち込みなどがみられた。（表２）

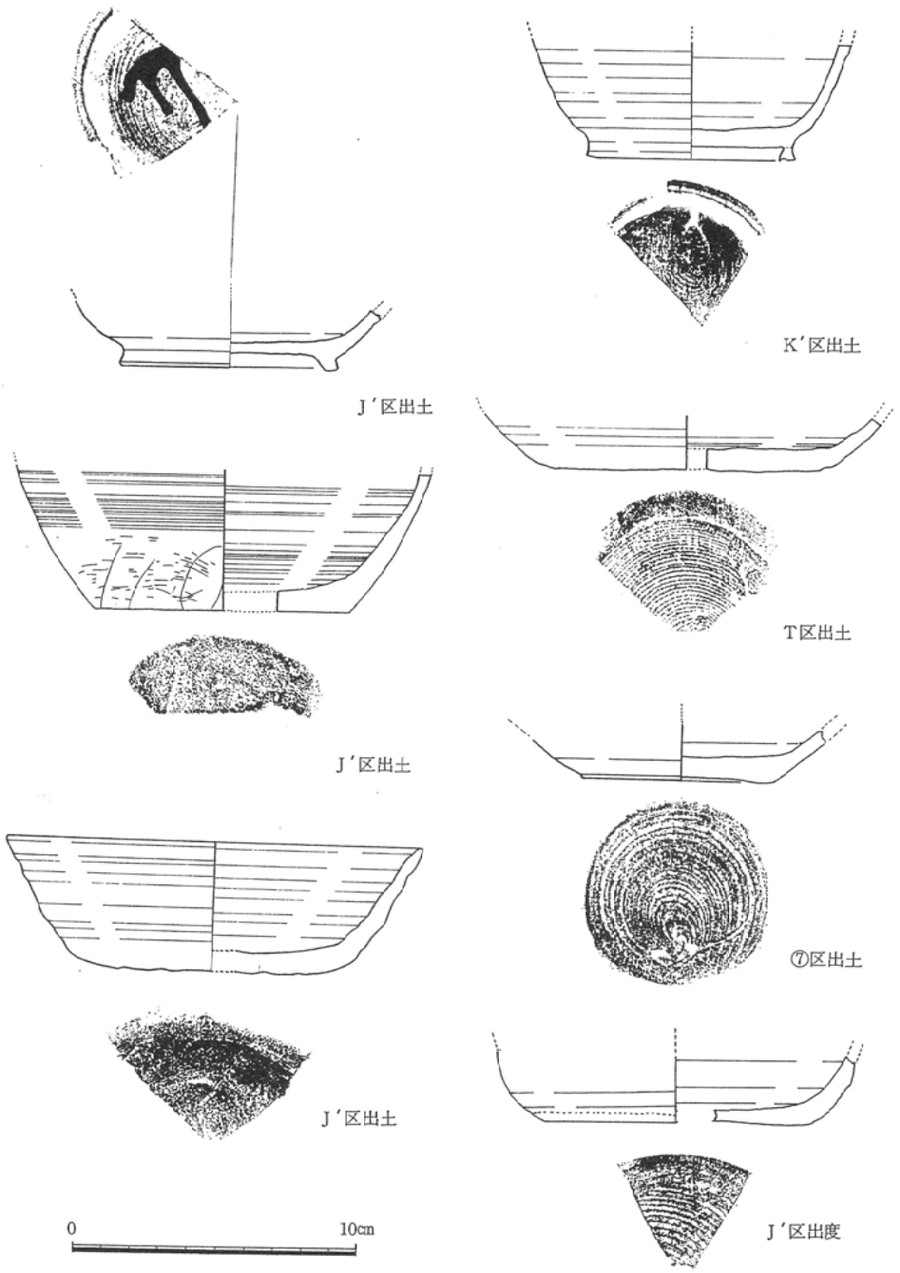
遺構の状態としては東面が大変よく保たれており、遺物包含層も良好であり、圃場整備による攪乱をうけていなかった。なお、調査区域を南北に分断する圃場整備によりできた水路より北には、今回の調査では遺構が一箇所も発見されなかった。



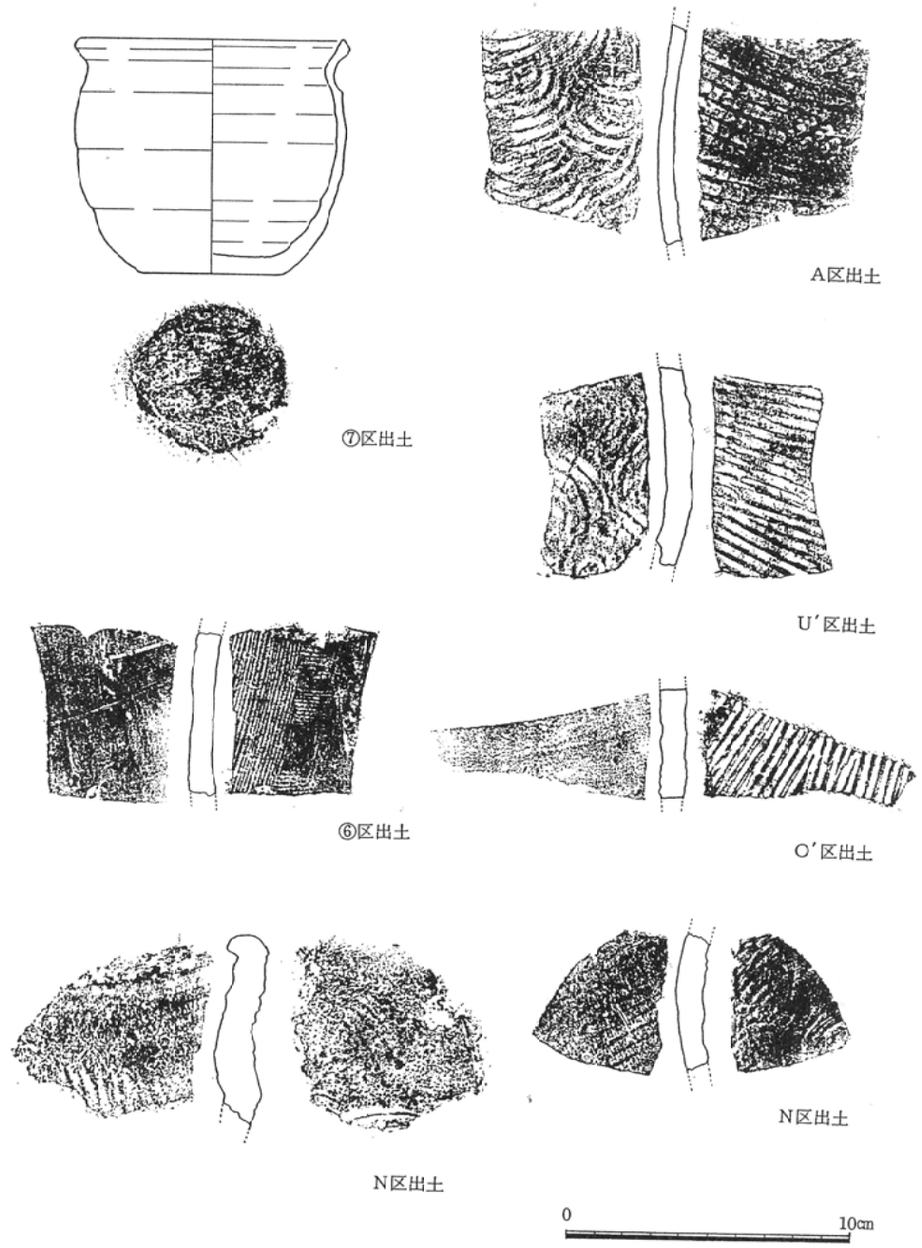
第９図　Ｊ′区遺構平面図



第10図　Ｊ′区断面土層図



第11図　試掘調査出土土器(1)



第12図　試掘調査出土土器(2)

層序については基本的に、暗褐色土（耕作土）のⅠ層と、黒褐色シルト層で遺物包含層のⅡ層、及び地山である茶褐色粘質土のⅢ層に分けられる。なお、西側や北側の区の層序については、圃場整備のため区によりかなりの違いがみられる。

(3) 試掘調査の所見

試掘調査によって、本遺跡は平安時代中・後期を主体とする集落跡であることがわかった。さらに珠洲焼や青白磁の出土は、中世にもわたることを示している。

調査区を広げたＪ´区（第９～10図）からＯ´区にかけての一帯は、遺構の状況及び、出土物などからみて、集落の中心区域であると推測できる。

この東側の集落と、西側の柱穴がみられるＮ区・Ｏ区を中心とする集落は、河川跡の存在（本調査により確認）や地形により接続していないものとみられる。東側から出土した土器は、相対的に少し古いと思われるものがあることから、はじめに遺跡の東側に人々が住み始め、すこし後になって河川の西側にも集落ができたという仮説も可能である。なお、西側の集落跡は削平されてしまったが、東側一帯は表土の上に盛土がなされ、遺構は保存されることになる。

塚田遺跡は今回の調査区域外にものびることも予想されることから、付近一帯を遺跡としてとらえることが必要である。今回の調査で「山形県遺跡地図」の範囲を訂正することが必要となったわけであり、平安時代の小鶴沢川流域に住む人々の生活を知るための重要な遺跡である。

5．発掘調査の目的と方法　（第13図）

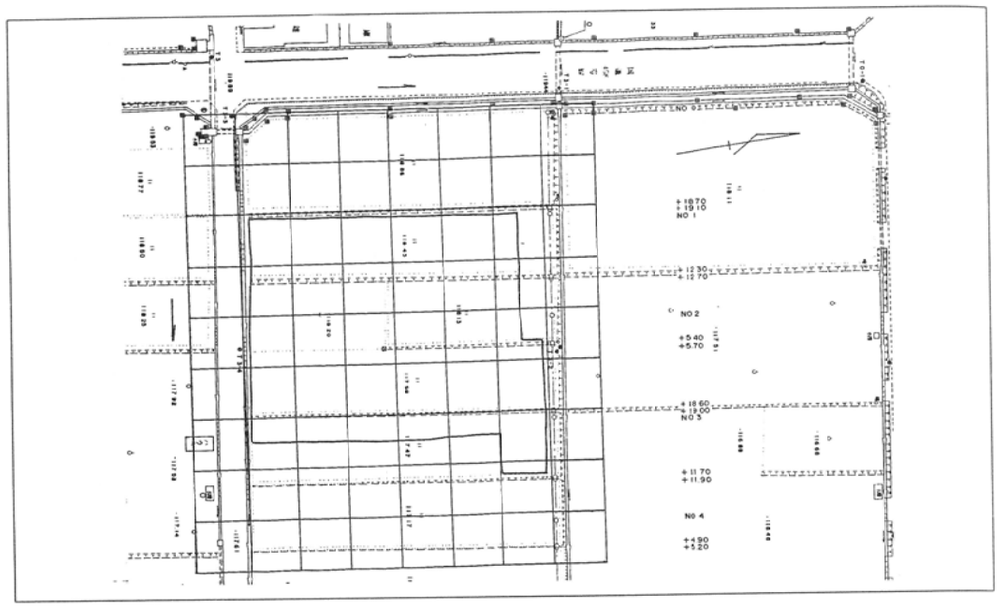
塚田遺跡のある地域は、周囲よりわずかに高い台地のような地形になっている。この付近一帯は、以前から水田の耕作や暗渠排水工事などの際に、土器片が発見され、遺跡であることが知られていた。今度、大寺小学校の移転、新築の用地として、この塚田遺跡周辺の地域に決まり、その内容が具体的になってくると、学校建設のための工事によって、遺跡が壊される可能性がでてきた。

遺跡は、昔の人々が実際にそこで日々の生活を営み、地域に残された貴重な文化的遺産であり、現代に生きる、私達全ての共通の財産である。そして、それは次の世代へ継承し、保存していくべきものである。遺跡は、一度破壊されると決して元の状態にもどすことは不可能であり、永久に失われてしまうのである。今回の調査は、校舎の建設される所が傾斜地であり、地面を削って平坦にする必要があり、その部分について、遺跡を調査し、記録として残しておくために実施したのである。調査によって発見された建物跡や溝跡、土壙とよばれる穴などの遺構や土器・石器などの遺物は、文字記録としては残っていない地域の歴史を雄弁に語り掛けてくるのである。

遺跡のほとんどは、地下に埋没している。そのため、地表面からはその状況がなかなかつかみきれない。いつの時代の遺跡であるのか、どの位の広がりがあるのか、また、深さはどの程度なのか、などの具体的な情報を得るために、本調査に先立って広い範囲にわたって試掘を行った。その結果、塚田遺跡は、出土した遺物から平安時代の集落と考えられること、柱穴が確認されたことから、掘立柱の建物跡があったこと、それらの建物跡は、表土（現在の水田の耕作土）の直ぐ下の土層で確認出来ることなどがわかった。

そのような、試掘調査の結果をうけて、建物跡の配置や全体の村の様子を明らかにするには、面として広い範囲を調査する必要があり、また、現在の水田をつくる際に平坦にして広い水田に造り変えているために、その際にある程度もとの地形が削られていることなどが考えられ、水田の耕作土は、重機（バックホー）を用いて取り除くことにした。

遺跡の土層の堆積状況は、基本的に３層に分けることができる。第１層は、表土で現在の水田の耕作土である。厚さは、20～30㎝位である。第２層は、厚さ５㎝位の薄い層で、木炭片のような炭化物を含む黒褐色の土層で、遺物を含んでおり、その当時の人々が生活を営んでいた地表面（生活面）と考えられる。この土層は、遺跡の西側の道路に近い所では確認できず、水田の造成などによって削られてしまっ



第13図　塚田遺跡グリッド設定図

たと考えられる。第３層は、黄褐色や茶褐色の締まった土層で、地山と呼ばれる自然堆積層である。掘立柱建物跡の柱穴はこの第３層（地山）を掘り込んでおり、その痕跡は、第３層の面で黒い土色の違いとして確認することができる。

重機で表土を取り除いた後、その表面の土をきれいに取り除くと、地山を掘り込んで営まれた遺構に堆積した土は黒褐色をしており、周囲の土とは明瞭に区別することができる。このような作業によって柱の配置や位置関係を確認し、建物の配置や規模を明らかにしていくのである。また、これらの遺構の状況や出土した遺物の位置などの関係を確認し記録するために、遺跡全体を覆う網（グリッド）を設けた。グリッドは、国道 458号線にそった境界杭を利用し、10×10mを一区画とする杭を設け、それを基準として、建物跡や溝跡などや出土した遺物の位置関係を記録した。その基準としたグリッドの軸は、Ｎ８°Ｅの方向になっている。

６．発見された遺構　（第14～18図、図版６～12）

遺構の分布とその状況

今回の調査で、表土を取り除き、詳しく調査を行った面積は、約2620㎡ほどである。その調査区域の地形の様子をみると、西側の国道に近い所が高く、東へ向って緩く下る傾斜面になっている。そして調査区の東の端あたりで急に低くなる部分があり、その一段低くなった所には、丸い大小の礫が堆積し、一見河原のような状況になっていた。

また、調査区の南側では、西から東へ斜めに、大小の丸い礫を多く含む黒っぽい土層が広がっていた。その下の様子を見るために、一部を溝状に深く掘り下げてみたところ、地山の層が急に下っていくことが確められた。地山層の上には元々の地表面と考えられる黒く薄い土層（旧表土）が堆積しており、その上に、大小の丸い礫を含む層が被っている状況であった。現在の圃場整備される前の字限図をみると、遺跡の南と北に堰のような流れがあったことがわかる。

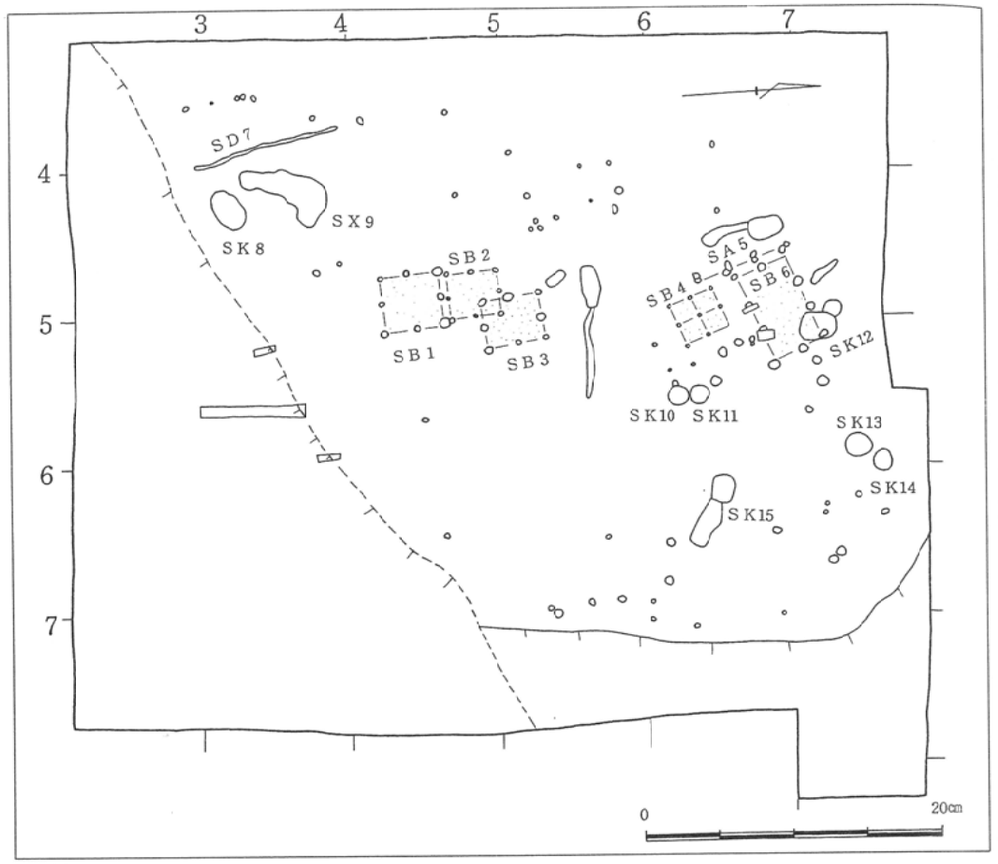
そのようなことから、集落が営まれていた当時の地形は、遺跡の西側に西の山から流れてくる小河川があり、その流れにはさまれた舌状に張り出した台地であったと考えられる。そして、ある時期に川の上流部から洪水などによって土砂が押し寄せ、谷のようになっていた低い所が埋め尽くされたのであろう。遺跡の土層の堆積状況から考えると、以上のような事が言える。

遺構は、国道に近い西側の部分では、以前に水田の造成によって削り取られているために、建物跡のようにまとまった状態で発見することができなかった。また台地の縁にあたる部分には、あまり多くの遺構は発見されなかった。建物跡などがまとまって発見されたのは、台地の縁よりも僅かに入った地域であり、塚田遺跡の集落は、台地の縁に近い先端部に営まれていたと言える。

検出された遺構とその種類　（第14図）

調査を行った区域からは、掘立柱建物跡や溝跡、柱穴、土壙と呼ばれる地面を掘り込んだ穴など、約60基あまりの遺構が発見された。その一つ一つに番号を付けて登録し記録した。そして、建物跡や溝跡のような、それ自体で遺構の性格を表わしているものには１から順に番号をつけ、建物跡を構成する柱穴（掘り方）などのように、一つのまとまった遺構の一部を成しているものには100から番号を付けて区別した。

また、それぞれの遺構の性格を示すために、溝跡にＳＤ、建物跡にＳＢ、塀跡に



第14図　塚田遺跡遺構全体図

ＳＡ、土壙にＳＫ、性格の不明なものにＳＸ、建物跡を構成する柱穴にＥＢという記号を付け、その記号をみると、発見された遺構の性格がわかるようにした。

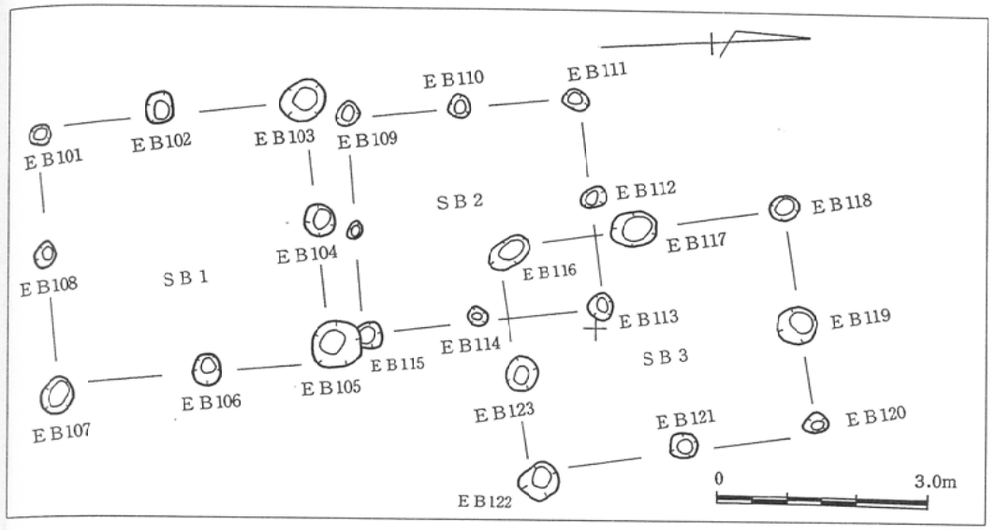
今回の調査で発見された遺構をまとめると、掘立柱建物跡が４棟、倉庫跡が１棟、目隠し塀１基、土壙13基、ほかに溝跡、柱穴などである。以下、その主要なものについて説明することにする。

発見された主要な遺構について

(1)　ＳＢ１建物跡（第15図、図版７・９）

調査区の南側、４－５グリッド付近から発見された、南北約3.8m、東西約3.6mほどの掘立柱建物跡である。桁行２間、梁間２間の大きさで、ＥＢ101からＥＢ108と記号をふった８本の柱穴からなる。

掘立柱の柱は、柱の直径よりも大きい穴を最初に掘り、その穴に柱を直立させて据え付け、その周囲を再び埋め戻してしめ固めて建てられている。その最初に掘ら



第15図　ＳＢ１、ＳＢ２、ＳＢ３建物跡平面図

れた穴を掘り方というが、ＳＢ１建物跡の掘り方は、直径30～70cmとまちまちである。柱は朽ちて残っていないが、その柱の朽ちた跡が黒くなって残っていて、柱の位置を確かめることができる。この建物跡では、掘り方のほぼ中央に柱を据え付けていたことがわかる。柱の大きさは約15cm位の円柱である。

それぞれの柱の間隔は、桁方向で約 1.9m、梁方向で約 1.8mの等間で、ほぼ正方形に近い建物跡である。ＳＢ１建物跡の向き（主軸）は、Ｎ３°Ｗで、わずかに西にふれる。また、北東隅に位置するＥＢ 105の掘り方は、ＳＢ１に接して発見されたＳＢ２建物跡の掘り方を切っており、両者に時期的な差があることが確かめられる。

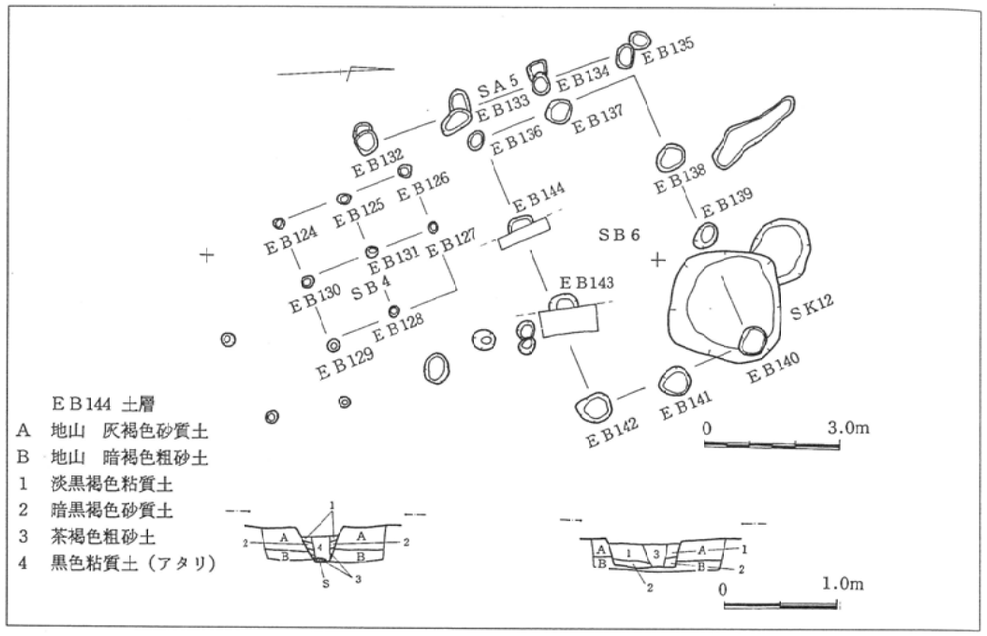
(2)　ＳＢ２建物跡（第15図、図版７）

ＳＢ２とした建物跡は、ＳＢ１と同じように、２×２間の掘立柱による建物跡である。ＳＢ１の北側に接して発見され、ＥＢ109からＥＢ115の８本の柱によって構成される。南東隅のＥＢ115の掘り方は、ＳＢ１のＥＢ105に切られている。

建物跡の大きさは、南北約3.4m、東西約3.0m位で、柱の間隔は、桁行1.7m、梁間1.5mほどの等間である。掘り方の大きさは、直径約30cmの円形で、ＳＢ１と比べると比較的小さい。主軸はＮ２°Ｗで、建物の向きはＳＢ１とほぼ同じである。

(3)　ＳＢ３建物跡（第15図）

前に述べたＳＢ２と一部重なった状態で発見された。２×２間の掘立柱建物跡で



第16図 ＳＢ４、ＳＢ５、ＳＢ６建物跡平面図

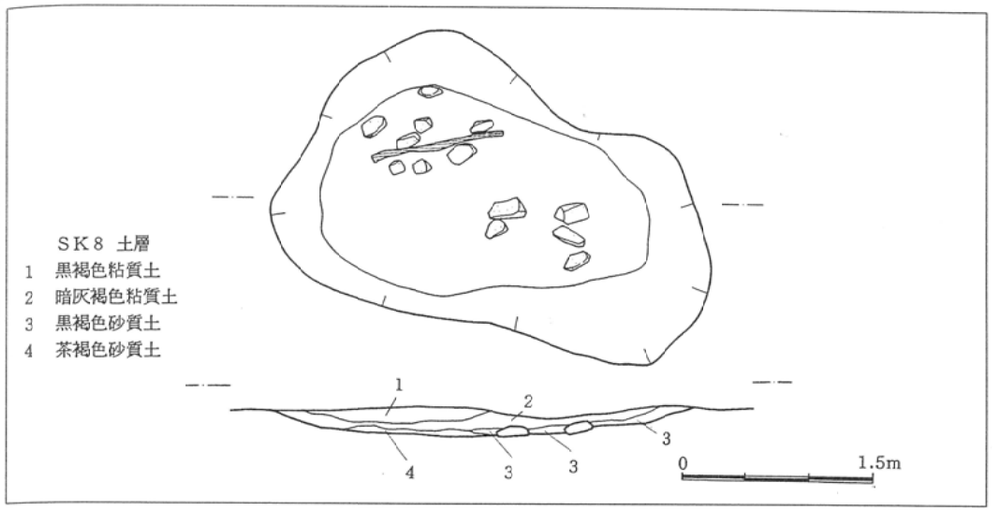
ある。ＳＢ３には、ＥＢ116からＥＢ123の８基の掘り方があり、南西部がＳＢ２の北東隅と重なっている。このことから、２つの建物跡には時期差があることがわかるが、掘り方の切り合いがないために、前後関係は不明である。

建物の大きさは、南北約4.1m、東西約3.2mで、柱の間隔は桁行2.05m、梁間1.6mのほぼ等間である。掘り方の大きさは、径40～60㎝位の円形か隅丸方形をしており、深さは約30㎝である。ＳＢ３の主軸は、Ｎ５°ＷでＳＢ１、ＳＢ２の両建物跡よりもやや西にふれて建っていたと考えられる。

(4) ＳＢ４建物跡（倉庫跡）（第16図、図版６）

調査区北側の６－５グリッド付近で確認された建物跡で、ＥＢ124からＥＢ131の掘り方によって構成される。北東隅の柱は確認されなかったが、２×２間の大きさで、中央部にも柱があり、その構造から床高の倉庫跡と考えられる。

掘り方の直径は、径約30㎝の円形をしており、建物の大きさは、南北3.1m、東西2.85m位である。柱の間隔は、桁行1.55m、梁間1.4m位で、ほぼ等間である。建物の主軸は、N20°Wで、前に述べたＳＢ１～ＳＢ３と比べると西に大きくふれて建っていたことになる。



第17図 ＳＫ８平面図・断面図

(5) ＳＡ５（目隠し塀跡）（第16図）

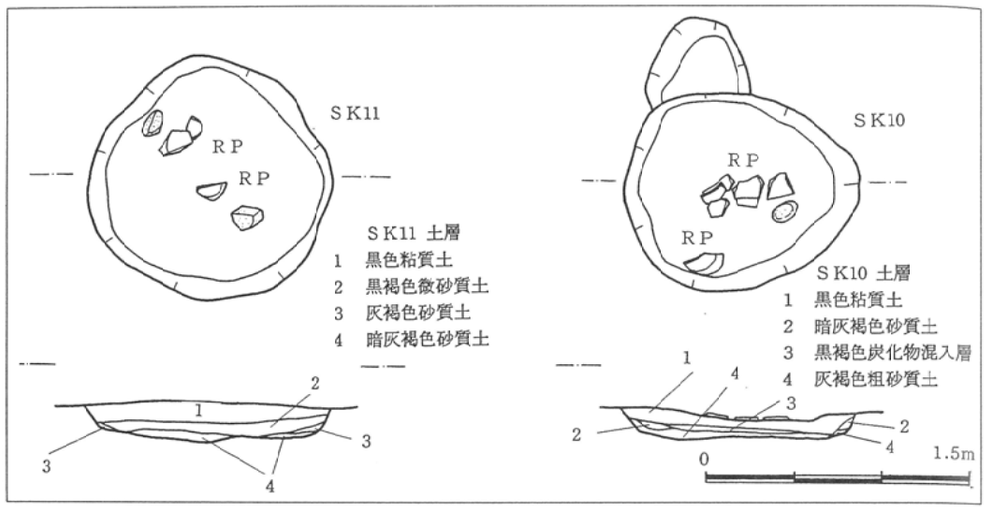
ＳＢ４倉庫跡と隣接して発見されたＳＢ６建物跡の西側にそって発見された３間の柱列で、塀の跡と考えられる。その方向は、N20°Wで、前に述べたＳＢ４やＳＢ６と同じ主軸である。ＳＡ５は、ＥＢ132からＥＢ135の４本の柱が建ち、その間をふさいで目隠しのような性格をもった遺構である。

柱の間隔は、約2.1mで、全長6.3m位の長さであったと思われる。ＳＡ５の掘り方は、いずれも２基の切り合いがあり、大きさは径40～50㎝の円形や隅丸方形をしており、前にあったものを建て変えていることがわかる。

(6) ＳＢ６建物跡（第16図、図版６）

ＳＢ４倉庫跡の北側に発見された２×３間の掘立柱建物跡で、今回の調査で発見された建物跡のなかでは一番大きい規模である。北西隅の掘り方は検出できなかったが、ＥＢ136からＥＢ144の９本の柱跡が確認された。また、北東隅のＥＢ140は土壙ＳＫ12を切って建てられている。

建物の大きさは、東西約6.4m、南北約3.6mで、柱の間隔は桁行2.1m、梁間1.8mのほぼ等間である。掘り方の直径は50～70㎝と大きく、円形をしている。ＥＢ143とＥＢ144の断面をみると、掘り方のほぼ中央に径15㎝位の柱の痕跡（アタリ）が認められ、その周囲を地山の土を含む土層を２～３層に分けて埋め固めている状況がわかる。ＥＢ144の掘り方の底には、柱の根元の部分に小礫を置いて柱を建てている。その主軸はN70°Eである。



第18図　ＳＫ10、ＳＫ11　平面図・断面図

(7)　土壙（ＳＫ）（第17～18図、図版９～12）

土壙とは、地面を円形や楕円形に掘り込んだ穴のことで、塚田遺跡からは11基ほどが発見された。これらの土壙がどのような用途であったのかについて、それぞれの土壙に対して明らかにするのは困難である。つまり、形や大きさ、深さなどがまちまちであり、遺物が全く出土しないものや、まとまって発見されるものなど、色々の状況が認められるからである。ここでは、その特徴的な土壙について説明することにする。

ＳＫ８（第17図）

調査区の南西端、３－４グリッド付近で確認された土壙で、大きさは長径3.5m、短径2.1m程の不整楕円形をしている。深さは、約25㎝と浅く、地山からゆるやかに掘り込まれ皿状を呈する。底面に、20～30㎝の大きさの円礫が多数認められ、柱状の木製品が１本出土しただけで、土器片などは全く認められない。その内部には、黒っぽい粘質の土が堆積しており、その用途や時期については、明らかでない。

ＳＫ10、ＳＫ11（第18図）

この２基の土壙は、ＳＢ４倉庫跡の東、６－５グリッド付近から発見され、接した状態で検出された。形状や大きさもほぼ同じで、ＳＫ10は直径1.3m、ＳＫ11は直径1.4mのほぼ円形をしている。深さは、15～20㎝位で壁際から急に掘り込まれ、底面は平坦である。

土壙の内部に堆積している土は、黒っぽい炭化物を多く含む土層で、ＳＫ10では、

第３層に薄い炭化物を一面に含む層が認められた。両方の土壙からは、須恵器の坏や赤焼土器甕などの土器がまとまって出土しており、不用になったものを捨てた穴ではないかと考えられる。

建物跡の配置とその様子

これまで述べてきたように、塚田遺跡からは当時の村の様子を示す多くの遺構が発見されている。その全ての遺構が同じ時期に存在したのではなく、村として存続していた期間を通して、建て変えられたり、新しく造られたりした結果として確認されたのである。各遺構のなかには、お互いに重なり合った状態で発見されたり、掘り方が切り合っているものもある。ＳＢ１～ＳＢ３の３棟の建物跡や、ＳＢ６のＥＢ140とＳＫ12などの重複状況や切り合いから、少なくとも３時期にわたる時期があったと考えられる。しかし、出土した遺物をみると、いずれも同じような特徴をもっており、それ程時期差があったとは認められないので、比較的短期間の変遷であったのであろう。

調査区の南側で発見された、ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ３の３棟の建物跡では、ＳＢ１とＳＢ２の掘り方の一部が切り合っており、ＳＢ２を切ってＳＢ１が存在する。両者の建物の向き（主軸）は同じで、ＳＢ２からＳＢ１へ建て変えられたと考えられる。ＳＢ２とＳＢ３は重なり合った状態で発見されたが、ＳＢ３の主軸はわずかに西にふれるが、ＳＢ１とＳＢ３は同時に存在した可能性がある。これらの建物跡はいずれも南北棟である。

一方、調査区の北側の６－５グリッドで発見されたＳＢ４・ＳＡ５・ＳＢ６は、お互いに接した状態で発見された。ＳＢ４は倉庫跡で南北棟の建物であり、ＳＡ５と同じ向きである。ＳＢ６は、２×３間の比較的大きな東西棟建物跡である。ＳＢ６の主軸は、N70°ＥでＳＡ５に直交しており、ＳＡ５はＳＢ４とＳＢ６を区画する目隠し塀と考えられ、これらは、同じ時期に存在し、集落の一部を成していたと思われる。ＳＢ６は母屋的な建物なのであろう。

今回の塚田遺跡の調査で発見された各建物跡のあり方は、この地域の農村集落の一端を物語っていると思われる。それは集落全体のほんの一部ではあるが、母屋的な中心となる建物があり、倉庫跡や小規模な建物跡数棟がその周辺に配置されていた状況を考えることができるのである。この周辺には、村があった時代の区画された水田の跡（条里制）が広く分布していた。山辺町の西に連なる白鷹丘陵から流れ下る河川を利用して、低地に水田が広がり、そこよりやや高い台地に村が営まれていた様子を、塚田遺跡から発見された遺構は語りかけてくれるのである。

7．出土した遺物　（第19～25図、図版13～21）

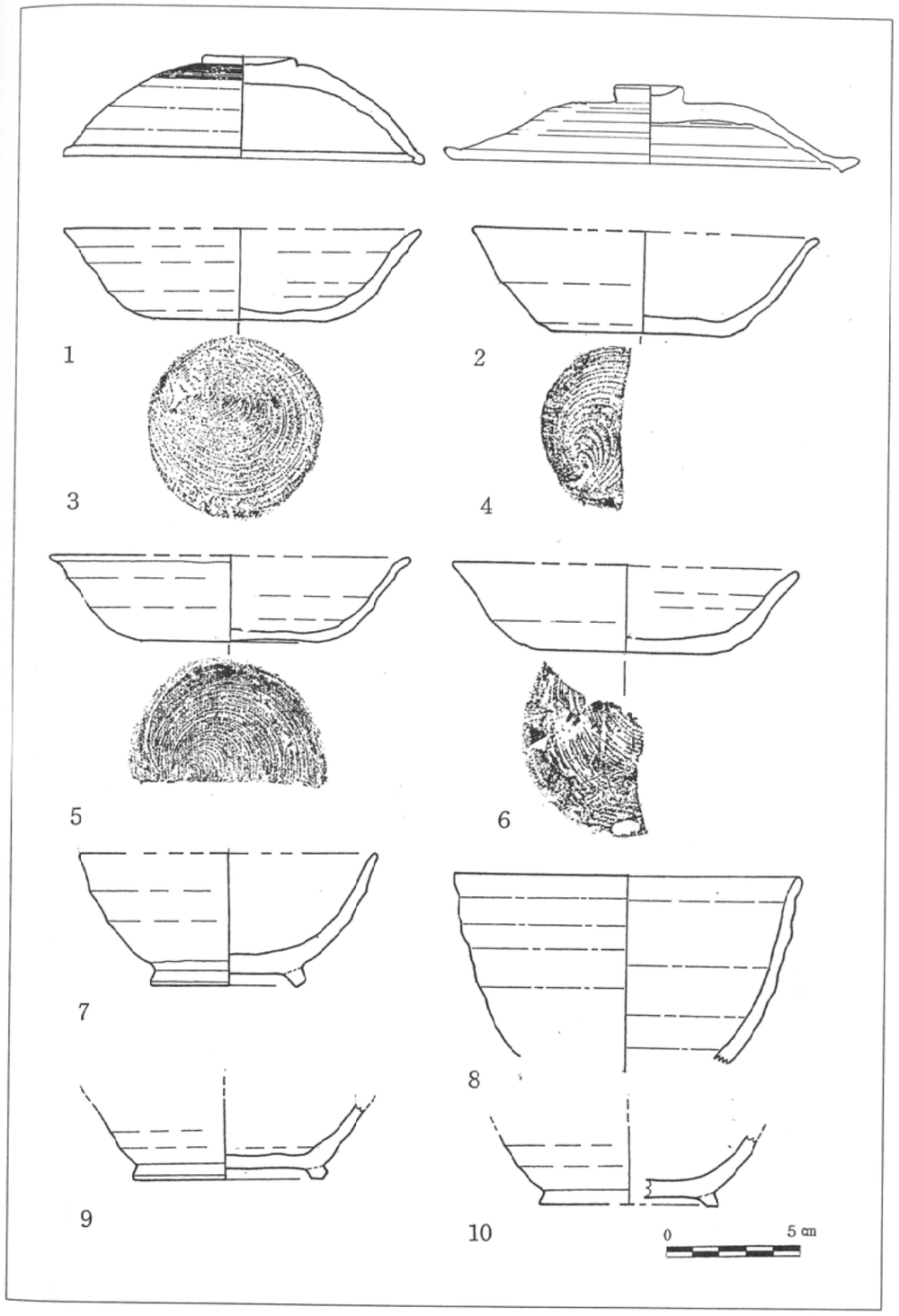
塚田遺跡から出土した遺物は約1000点を数える。大部分が土器の類であり、それに縄文時代の石器やその剝片11点、銭貨２点、近世及び近代の陶磁器９点で土器以外は直接本遺跡と関連がなく、近くの遺跡などから後世に流れ込んだり偶然に混入したものであろう。但し木製品が２点あり、１点は杭で、もう１点は柱根である。これらは遺構と同時期のものである。

その後整理されたものもありこれにもう数十片追加されると思われるが、完型土器も含めた土器総数905点中、須恵器644点、土師系土器261点、須恵器系中世陶器６片であった。土器の中で須恵器が71.1％、土師系土器が28.8％を占めることになり、３分の２が須恵器であることは、他の平安時代集落跡では土師器系の酸化炎焼成の土器が須恵器に比べて多いのにここでは逆転している。これは地域的な特色であろうか、また時期差であろうか。

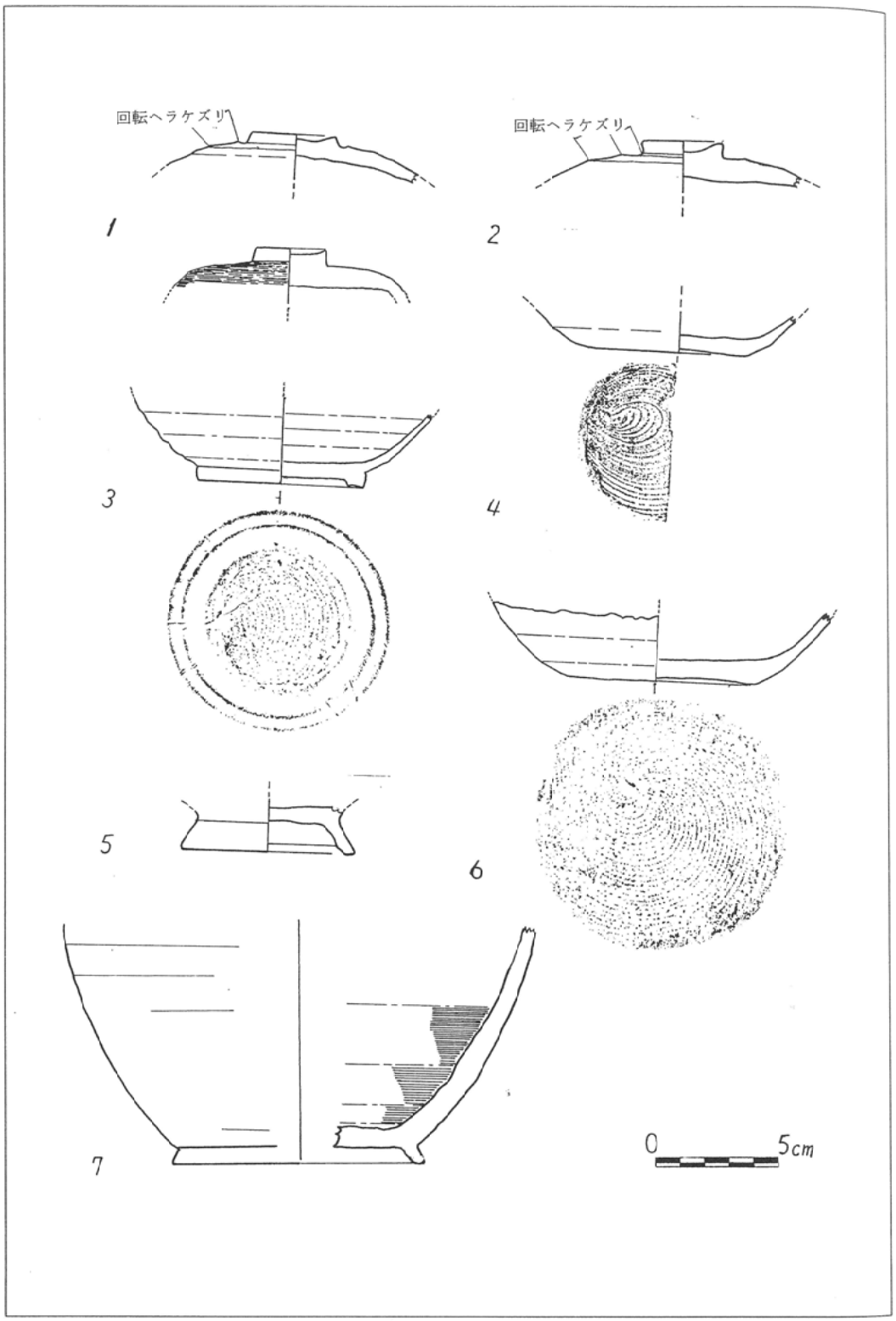
なお本報告書では酸化炎焼成による赤褐色や黄褐色の器色を呈するものを「土師系土器」とした。県内の大方の報告書においては、この種に属する土器を「土師器」と「赤焼土器」に分けて記述している。土師器はろくろ整形がなく、土師器の伝統を踏襲する黒色処理などを施したもの、赤焼土器は須恵器と同じろくろ整形により焼成は土師器の酸化炎焼成によっているものを指している。「赤焼土器」は、宮城県多賀城跡研究所において「須恵系土器」とよばれているもので、地域により研究者により「ろくろ土師器」「あかやき土器」「赤褐色土器」「酸化炎焼成土器」などと呼称されて非常にまちまちであり混乱する場合が多く、きわめて理解しにくい状況を呈している。

筆者らは、本遺跡出土のこの種の土器に細片が多く土師器と赤焼土器を区分することが難しかったこともあるが、土師器特有の器面の黒斑が赤焼土器などにもみられる矛盾もあるので、酸化炎焼成による軟質の土器は、また土師器の系譜にもつながると考え、「土師系土器」の呼称を用いることにした。従って土師系土器のなかには、土師器の製作技法をより強く残すものと、須恵器と同じ技法で焼成法のみ土師器独特の酸化炎焼成によるものの二様があり、またその中間に位置するものもあって画然と分類することは困難であると思われるのである。

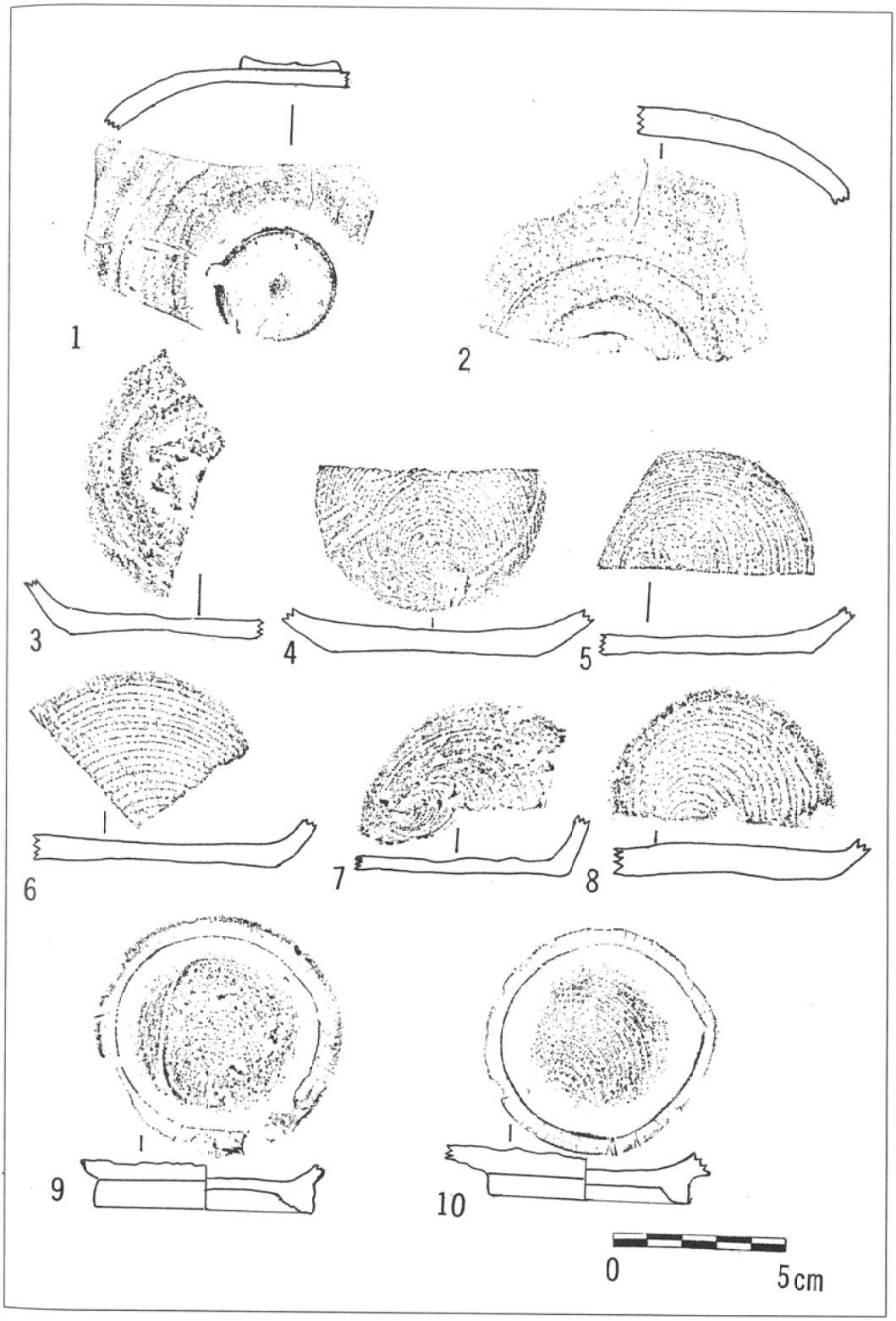
以上の点を述べて、須恵器・土師系土器・須恵系中世陶器を中心に出土遺物の概要を報告することにする。



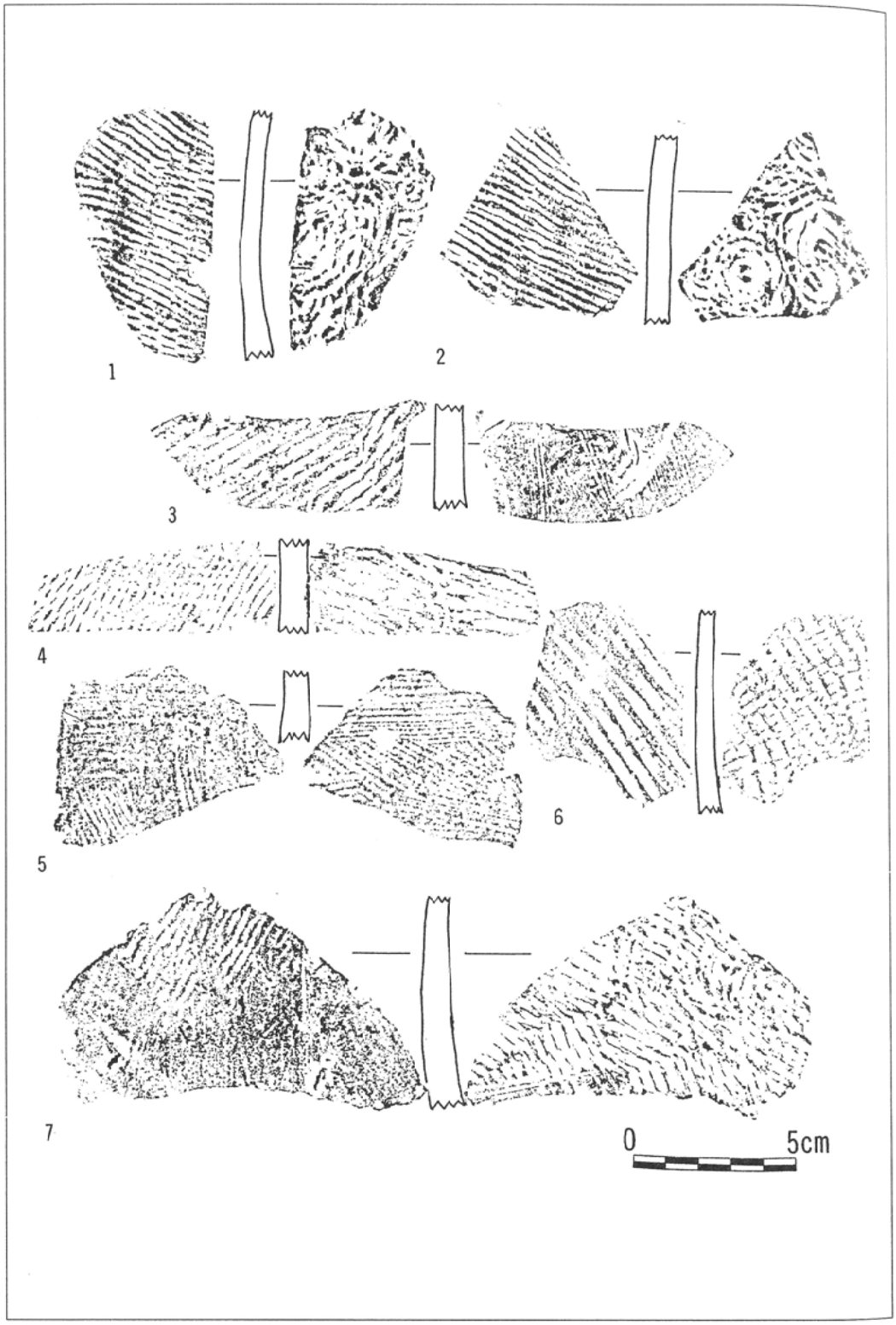
第19図　須恵器実測図



第20図　須恵器実測図



第21図　須恵器の蓋・底部のろくろ切り離し痕拓影



第22図　須恵器壺・甕などの外内面拓影

(1) 須恵器（第19～22図、図版13～17）

本遺跡出土の遺物のなかで須恵器がもっとも多い。土器のなかで70％をこえる。これは本遺跡のきわだった特色といわなければならない。9世紀から10世紀にかけてのふつうの集落跡においては、土師系土器（いわゆる赤焼土器が主体をなす）が多いのが通常である。

酒田市城輪柵遺跡は平安時代の出羽国衙であるが、この周辺には集落遺跡が密集分布する。例えば城輪柵遺跡の北に位置する「茅針谷地」遺跡においては、須恵器が15.1％、赤焼土器が78.8％である。同じく城輪柵の南に位置する「境興野遺跡」では赤焼土器が77％、「北田遺跡」では須恵器51％、赤焼土器48％でほぼ半々である。また「関B遺跡」では須恵器40.7％、赤焼土器54.7％を占め、赤焼土器の比率が高い。

内陸部において山辺町の東に位置し、東北自動車横断道にかかるために発掘調査が実施された山形市見崎地区の境田C′及びD遺跡は、やはり9～10世紀の集落跡であるが、須恵器は10％にみたない。須恵器と土師系土器の出土比率は、地域による差異もさることながら時期による違いが大きかったと思われる。9世紀前半までは赤焼土器の比率はさほどではないが、9世紀後半より10世紀にかけて赤焼土器の割合はふえつづけ、赤焼土器が出土土器数の半数をこえ、10世紀前半にはもっとも比率が高くなり、10世紀後半には少しずつ減少傾向を示すようである。以上のような状況から考えても、本遺跡は10世紀後半以降に営まれた集落である可能性が大である。

本遺跡出土の須恵器破片を器形別にとらえると「坏」が59.9％で半数以上を占め、「高台付坏」5.2％、「蓋」14.1％、「壺」13.3％、「甕」6.3％、その他鉢や椀把手がある。高台付坏は実数はもっと多いのではないかと思われるが、「坏」との区別が困難であったので「坏」に入れた場合もあるが、いずれにしても食膳具として日常的に使用された「坏」の類が半数以上を占めている。

「坏」（第19図）は口径13.2～13.6㎝、高さ3.2～ 3.5㎝、底径6.5～6.7㎝で、法量が小さく、底部の切り離しは回転糸切り、無調整のものが大部分である。篦切りのものは1点にすぎなかった。これを前出の境田遺跡から出土した須恵坏と比較すると小型化し高さも低いことがわかる。境田の例は、口径14㎝前後、高さ4㎝程度のものが多かった。

蓋は（第19～20図）「つまみ」が付くあたりに回転のケズリの跡が明瞭で、円板状の「つまみ」は、なかがくぼんで非常に低いものが整形の後貼り付けられている。全形をみると偏平なものと中高のものの二様があり、形も比較的小さい。

坏の高台は付け高台で、おおむね余り高くない。せいぜい５㎜前後であるが、外に張り出した高台には１㎝程度のものもある。（第20図５）高台付椀も数点あるが、高台は低い。すべて付け高台である。（第19図７～10）

壺は器形のわかるものは少なかったが、第20図７にみるように器表無文で、内面には横ナデが施されている。表面はよく磨かれている。

甕の破片は第22図に拓影をかかげたが、器表には条線状やそれらを直交させた文様、内面は同心円文、青海波文、格子目文、カキ目などが施される。器形が大きいので、叩きしめのために彫りこんだ板をあてたり叩いたりした際につけられた文様である。

須恵器と土師系土器の出土比率でもふれたように坏の法量の小さいことや蓋のつまみが低いことも、これらの遺物が11世紀前後のものであることを示している。

(2) 墨書土器（第24図、図版13）

本遺跡より７点の墨書土器、８文字が確認されている。すべて須恵器の坏で、１文字（記号）が第　図４の内面に「△」のように記されているほかは、すべて底面に書かれている。試掘調査によって出土した１点の他は、土壙ＳＫ10、11より第23図の土師系土器の甕などと共に出土したものである。

「爪」が３点、「水」が２点、「十万」が１点である。書体は「爪」の２例は同一であるがその他はそれぞれまちまちである。第24図４の「水」のように拙劣なものもある。墨書土器は一字のみの例が多く意味がとりにくいが、役所や役職名、人名や地名、施設名、寺院名、吉祥句を記したものが多いといわれる。「爪」のように身体の一部を記したものはないのがふつうで、このような例は県内の墨書土器では初めての例である。

思うに「爪」は、則天文字の「㔾」（天）を表わしたものではないかと思われる。これは「爪」又は「爪」などとも表記され、地方に普及するにつれて漢字の「爪」のように変化することはあり得ることで、特殊な字形が則天文字の意味はそのままに類似した漢字にあてられたのではないだろうか。９世紀末の置賜郡衙に擬定されている川西町下小松道伝

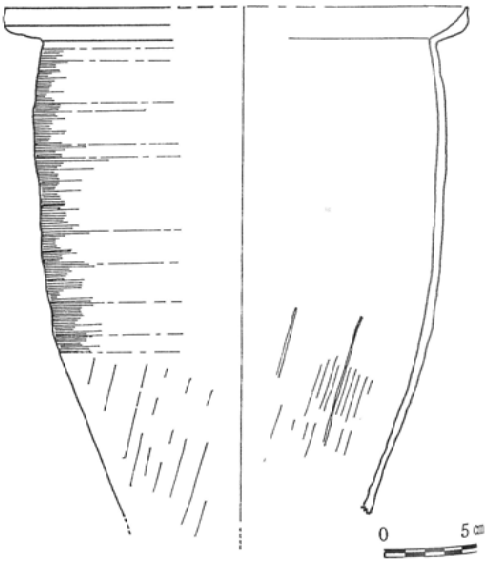
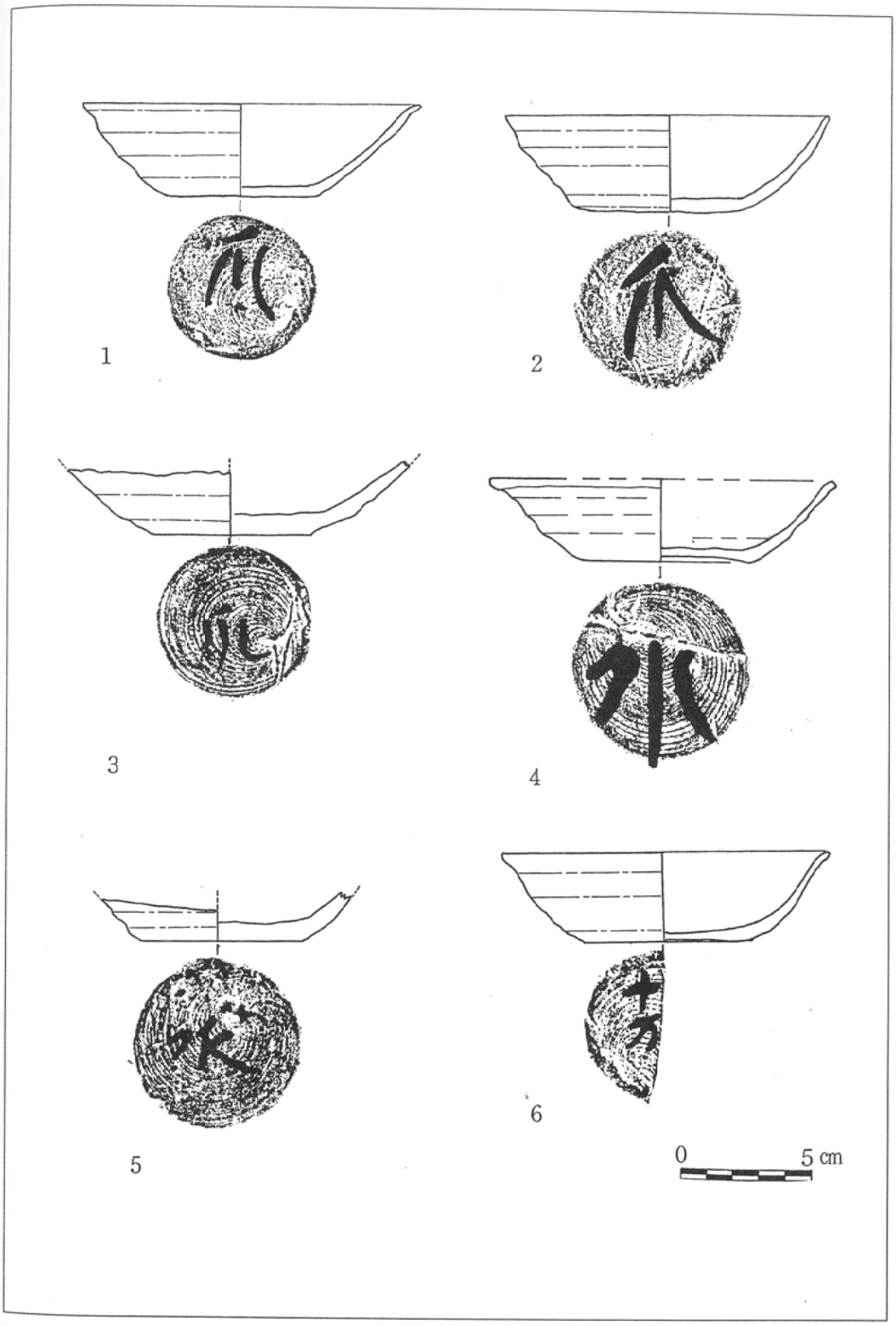
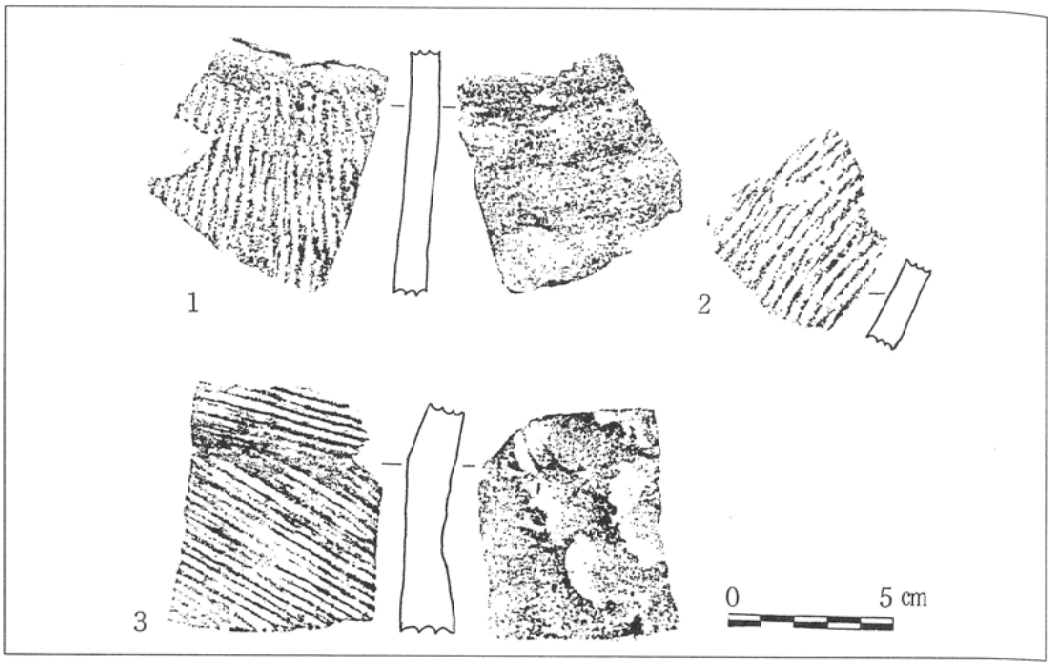


図23図　土師系土器甕実測図



第24図　墨書土器



第25図　須恵器系中世陶器の拓影

遺跡からも墨書土器の出土は多いが、その中にも「而」や「丙」の「几」構えの例が三例あった。これらが「爪」のように変化し、道教にみられる呪符のように記号化して「マジカルな威力」を持たせたことはあり得ると考える。ともに出土した土器にも「水」があったから、かんばつなどに際して豊かな水のめぐみを祈って、一種の儀式や呪術を行いそれを土壙に埋めたものと考えることができる。これらが出土した土壙の近くには北側建物跡があり、規模も大きく板塀を伴い、里長あるいは郷長などの有力農民の住居であった可能性がある。また土壙もほぼ円形で、２つ並んでおり、マジカルな威力を期待して埋められたもののように考えられる。

同様の呪術的な意味をもつ墨書土器に、前出の酒田市関Ｂ遺跡の土壙や井戸跡から出土した「霊」や「霊長」と書かれた土器がある。霊はもともと雨を欲するという意味があり、長は末長くという意味があるから井戸などにこれを投げ入れたのは水がかれることなく長く湧き出るようにという願いをこめた呪符的なものであったと思われる。

「十万」は吉祥句で、「水」や「天」は豊かな水の恵みを祈る当時の農民の心情を表わすものであったと思われる。なお他の遺跡出土のこの種の墨書土器の類例の増加を待って検討していきたい。

(3) 土師系土器（第12ノ１、23図、図版19）

この章の最初に述べたように、酸化炎焼成による赤褐色や黄褐色を呈する土器をこの類に入れた。９世紀や10世紀前後にままみられる内面黒色処理を施した土器はほとんどなかった。器形は「坏」「埚」「甕」などで、一例高坏の脚台もあった。ほとんどがろくろ整形のようである。

土師系土器はその器質の特性から煮沸用に用いられたものが多い。「埚」の外側の把手が３例出土している（図版19）。試掘調査の際に出土した壺は、小形ながらよく整った形をしている（第12図）。土壙から墨書土器などとともに出土した甕は、（第23図）口径27.7㎝、高さ34㎝ほどの長胴形甕で、蓋受けのために口縁部が「く」の字形に屈曲する。木製の蓋があり湯わかしなどに使われたものであろう。上半部はろくろ整形の跡が残り、下半部に箆ケズリの痕が認められる。粘土の輪を積み重ねた輪積みの手法でつくられたもので、かまどにかけられた煮沸用の土器で、平安期の集落跡から出土するこれに類する土器は多く、「こしき」などにも使われ、底部に穴があいている例もある。

(4) 須恵器系中世陶器（第25図、図版20）

器表に条線状叩目を施し、内面に丸いアテ痕の跡を残すのが特徴で、甕や壺など比較的大形の器種が多い。いわゆる「珠洲焼系陶器」といわれるものであるが、珠洲焼の製品かどうかは不明である。この種の窯が県内では未発見であることをみると、他から搬入されたものらしく思われる。

新館遺跡からもこの種のものが出土をみ、掘立柱建物の一部はこの陶器が使用された中世に営まれたものとしている。おそらく現集落の立地する山ぎわかその近くに中世の集落跡があり、そこから流れ込んだものと考えられる。

(5) その他の出土遺物（図版21）

表土中から石器が11点発見された。剝片が多いが、石箆やナイフ型石器に類似するものがある。

「永楽通宝」と「寛永通宝」の古銭が各１点、青白磁や染付の磁器、施釉の陶器の細片が10点ほど出ているが、近世から近代にかけてのものであろう。

遺跡の南側のＲＷ１の柱穴より柱痕が検出された。径12㎝の円柱で、底面はまるく削られていた。土壙ＳＫ15からも杭状の丸太が細片となって出土しているが材質は不明である。

8．塚田遺跡における古代集落の様相

―― まとめにかえて ――

この度の塚田遺跡の発掘調査によって発掘された遺構は、掘立柱建物跡６棟、土壙13、溝跡３、柱穴約50である。またこの台地は西側の丘陵から次第に東側にむかって傾斜するのみではなく、北東から南西へかけて小さな沢があり、校舎建設にともなって盛土される一段低くなる台地とは区画される居住空間であることが判明した。北側も沢にのぞみ、張り出した舌状台地であった可能性がある。

北側に２間×３間の住居があり、倉庫と西側に塀が立っていた建物跡で、住居南側の２つの土壙から考えて、この地域の有力農民の屋敷地であったものと思われる。溝をへだてて南側にも住居と作業小屋がくっついてあり、この住居が廃絶した後に、一部小屋と重なる形で２間×２間の住居が建てられていることがわかる。

すべて掘立柱によるもので、直径40～50㎝ほどのまるい穴を掘り、その中に直径15㎝ぐらいの丸柱を埋め込んでいる。この台地の東や西の空間からも柱穴が多く発見されているので建物があったのかもしれないが、柱の組合せが不明であったので、建物跡との認定はできなかった。

北側の家の前にあるまるい土壙は、深さが一定でマジカルな文字を記した墨書土器がまとまって出土したことから、呪術的な儀式や行事が行われた場所であったのではないのか。その文字の一部は、則天文字が変化して記号化したものと考えたが、690年に唐の則天武后によって制定された文字が日本の遠く東北地方まで普及していたことを示し、この集落に文字を書く人びとが居ったことも裏書きして興味深いものがある。それは「天」や「水」の字であったから水の豊かさをねがう農民の気持ちが伝わってくる。

出土した土器類は100年をこえるような長い年代にわたるものではなく、建物の建かえによる重複も少なかったことから、せいぜい数十年間いとなまれた集落であったと思われる。（第26図）

そのムラがあった年代については、建物跡のあり方や出土土器が暗示している。平安時代の前期である９世紀代であるならば、どこかに竪穴の住居跡が発見される場合が多いが、ここではみられなかった。また９世紀代の土器の坏では、ろくろからの切り離しが篦によって行われるものが多いが、ここでは９世紀後半より広く行われるようになった糸切りの技法によるものがほとんどである。従って本遺跡の年代は、平安前期には遡りえない。

さらに須恵器と土師系土器の出土量の割合では10世紀前半まで土師系土器の占め

る割合が増加する傾向がある。本遺跡では土師系土器が３分の１で、10世紀前半までの現象とは逆転しているので、年代はさらに下降するものと思われる。

県内における平安時代の須恵器や土師系土器の編年については、川崎利夫(1)、佐藤庄一(2)、手塚孝(3)らが作成した編年表がある。これらを総合的に勘案して考察を加えてみよう。本遺跡の須恵器坏は、高さが減じ底径が広く、無調整であるのが共通しており、蓋においてもつまみが著しく低い。地域的にやや離れているが、酒田市境興野遺跡ＳＫ26出土の須恵器や土師系土器よりもさらに新しい傾向を示す。それらは10世紀後半に位置づけられている。また12世紀前半といわれる藤島町平形遺跡Ｃ地点(4)の坏類よりは古い要素をもつ。以上よりすれば11世紀前半代と推定することが可能であろう。

山辺町大字大塚地内に玉虫沼があり、その近くに須恵器の窯跡群があって、発掘された１号窯から坏がかなり出土している(5)。その計測値平均は口径14.0㎝、底径5.2㎝、器高3.8㎝である。本遺跡の坏より口径がやや大きく、器高が高く、底径が狭い。そしてその年代を10世紀前後においている。従ってここから出土した坏は玉虫沼１号窯の製品ではないことがわかる。長胴形の土師系甕などはよく類似しているが、これは時期差がほとんどなく、長い期間同じものが使われている。玉虫沼窯跡群のなかで、もっと新しい窯跡が発見されれば別であるが、ここの製品でないことは確かである。この近くで比較的類似した坏は、寒河江市平野山第14地点出土のものがあるが(6)、いまのところどこでつくられたかの断定はできない。

以上のように本遺跡は11世紀前半、つまり西歴1000年代の集落跡の一部であった。その時期は、東北地方において「前九年の役」「後三年の役」などの戦乱が起きる前後でもある。平安時代前期まで行われていた律令制は衰退し、かつての房戸や郷戸にもとづく共同体的関係はゆるみ、独立した自営の農民が生まれてくる。この２軒～３軒の住居跡をみても、まわりに自家の畑地をもち、立木などで囲まれた農家の姿がよみとれるのではないだろうか。

この地のすぐ北には山辺北条里遺構があり柳沢条里遺構につづく。また山辺町の南には山辺町条里遺構があり、畦畔や水路・水田跡が良好な状態で検出された。須川流域には奈良時代から条里制が施行されていたことがうかがえる。律令制がおとろえの兆しをみせてきたとはいえ、条里制による口分田はこのムラがあったころまで機能していたのではないかと思われる。このムラの農民たちは、須川の近くまでひろがる低地部の良田を経営しながら徴税に応じ生計をたてていたのであろう。

行政的にこのあたりは、「出羽国最上郡山辺郷」に属するムラの一部であった。承平年間（931～937年）源順によって編まれた「和名類聚抄」に「山辺郷」がみえ、

須川西岸の地域は水田農業地帯として知られていたらしい。

山辺町南部から山形市西部にかけて「大曽根荘」があり、中央の有力な貴族であった藤原頼長の荘園であったことが、彼の日記「台記」によって知られる。それ以前は、父の関白忠実の荘園で、子の頼長に引きついだものである。仁平３年（1152年）９月14日の条によれば、陸奥・出羽の押領使である奥州平泉の二代藤原基衡に、宮城県にあった高鞍・本良、山形県の大曽根・屋代・遊佐の五つの荘園の年貢増徴を命じている。基衡はいったんこれをはねつけているが、最終的に妥結がはかられ、布300反、馬２匹が納められることになった。この記事のなかにも大曽根荘は「田多く地広い」地域として記載されている。

律令制の衰退によって各地に荘園の成立をみるが、大曽根荘はすでに12世紀前半には存在していることが明らかで、あるいは11世紀後半には成立していたのかもしれない。塚田遺跡のあたりが大曽根荘内であったかどうか不明であるが、奥州平泉の藤原氏の支配下にあり、生産力の高い豊かな土地であったことをうかがうことができる。

平安時代後期には、大曽根荘の北にいまの山辺町を中心とした「山辺荘」が成立したらしい。その文献上の初見は、貞治３年（1363年）８月10日の仁木義長預置状で、時代が下る南北朝期であるが、それ以前からあったことは確かである。塚田遺跡などの集落は、やがてこの荘にくみいれられることになる。塚田遺跡が数十年で廃絶する理由は、山辺荘の成立による村落の再編成と関連するのではないだろうか。

この周辺には、定額寺の瑜珈寺があったといわれ、根際に普光寺山経塚、大寺に安国寺裏山経塚などの平安時代にまで遡る仏教遺跡や玉虫沼古窯跡のような窯業遺跡も存在する。これらは古代からの農業生産力を背景にして栄えたのであろう。塚田のムラの西側には、南北に通じ大曽根荘から寒河江荘にいたる「山の辺の道」もあったらしい。古代からの道にそって、低地部の水田をのぞむ台地に11世紀前半にあったのが塚田遺跡などのムラであった。

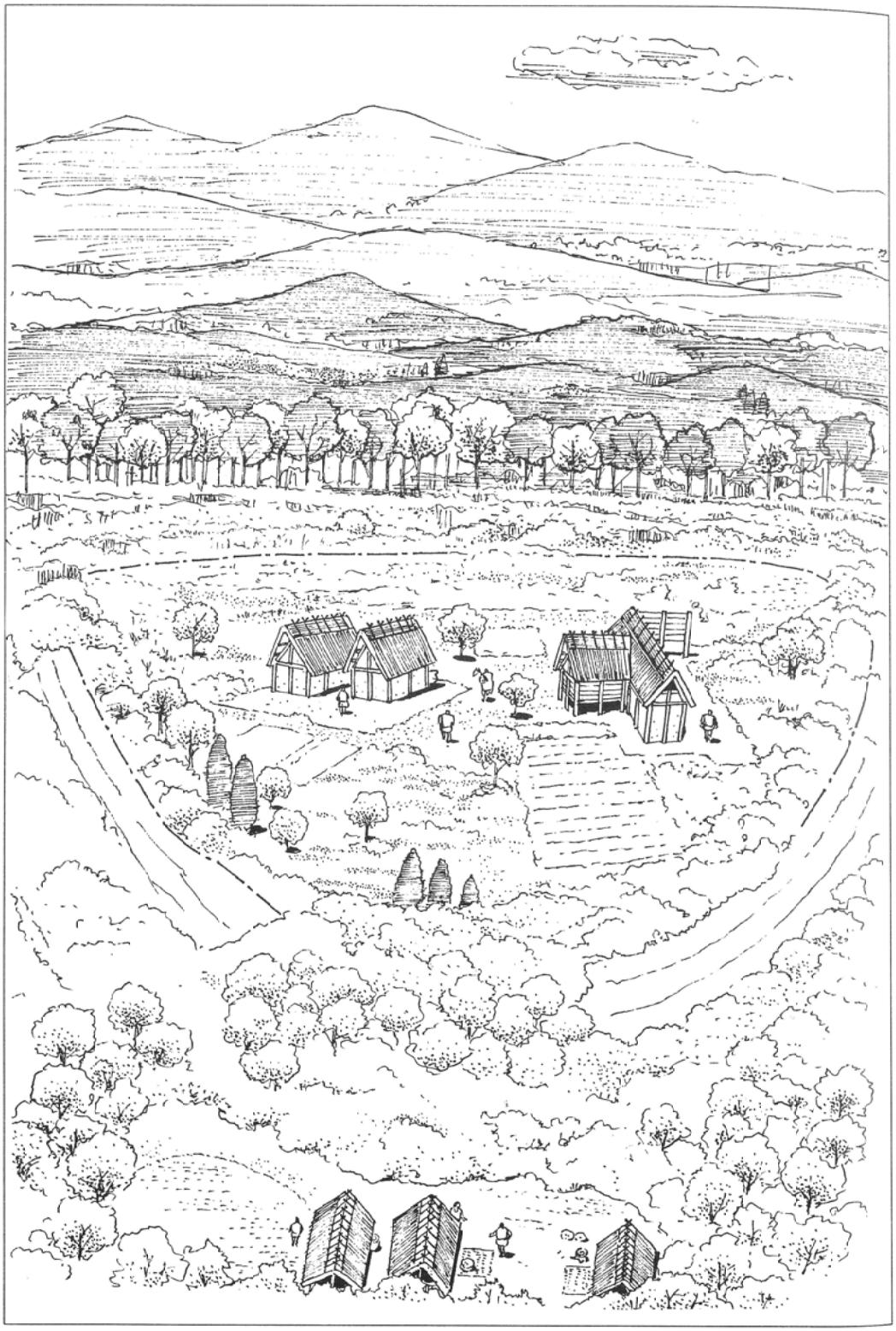
もしこれが調査されずにそのまま闇にほうむられるとすれば、これだけの情報が全く知られないままに終ったにちがいない。塚田遺跡の資料と記録は、他の遺跡との比較検討にも活用され、これから地域の歴史をより明らかにしていくために寄与することと思う。

〔註〕

(1) 川崎利夫「赤焼土器編年表」（山形県埋蔵文化財発掘調査報告書46）「境興野遺跡」所収。1981年。

(2) 佐藤庄一「庄内地方平安時代土器編年図」（山形県埋蔵文化財発掘調査報告

書67）「新青渡遺跡」所収。1983年。
(3) 手塚孝「米沢盆地盆地出土須恵器編年図」（８・９世紀）（米沢市埋蔵文化財調査報告書36）「大浦Ｂ遺跡」所収。1993年。
(4) 川崎利夫・佐藤庄一他「平形遺跡・周辺遺跡」（山形県埋蔵文化財調査報告書26）1980年。
(5) 茨木光裕「玉虫沼１号窯跡」（山辺町埋蔵文化財調査報告書１）1989年。
(6) 寒河江市教育委員会「平野山窯跡第14地点発掘調査報告書」1984年。



第26図　塚田遺跡の復元想像図

本文執筆及び挿図作成者

塚田遺跡のあらまし	川崎利夫
1．はじめに	川崎利夫
2．塚田遺跡の位置と地形	川崎利夫
3．塚田遺跡周辺の歴史的環境	川崎利夫
4．試掘調査について	村山賢司 三浦浩人
5．発掘調査の目的と方法	茨木光裕
6．発見された遺構	茨木光裕
7．出土した遺物	川崎利夫
8．塚田遺跡における古代集落の様相	川崎利夫

○イラスト（第26図）　茨木恵美
細野講治

○整理作業参加者　川崎利夫　茨木光裕　鈴木利明　工藤一夫
村山賢司　三浦浩人

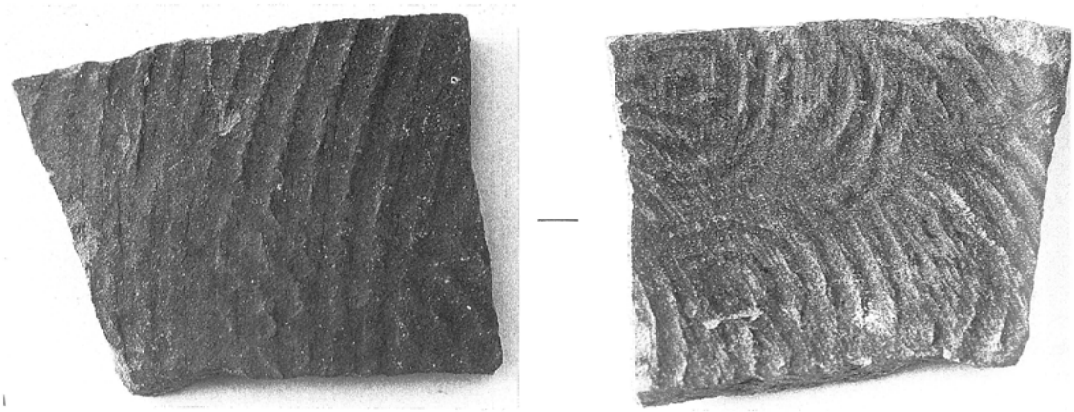
○図版撮影　事務局　川崎利夫　村山賢司　三浦浩人

1

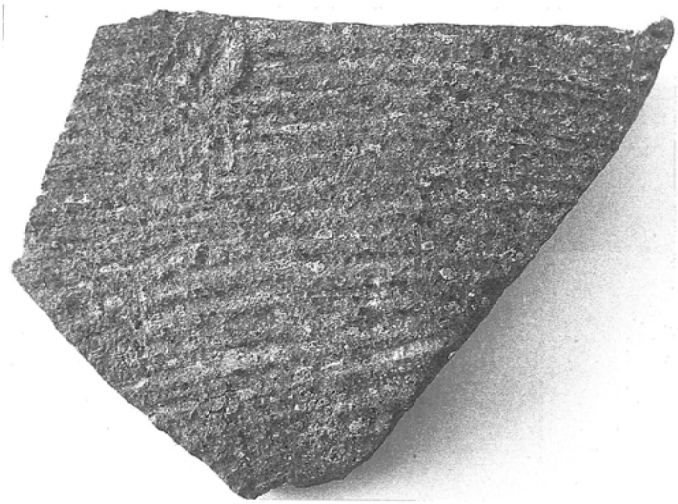
2

1．塚田遺跡を東側から望む

2．塚田遺跡近景（南東側より）



1



2

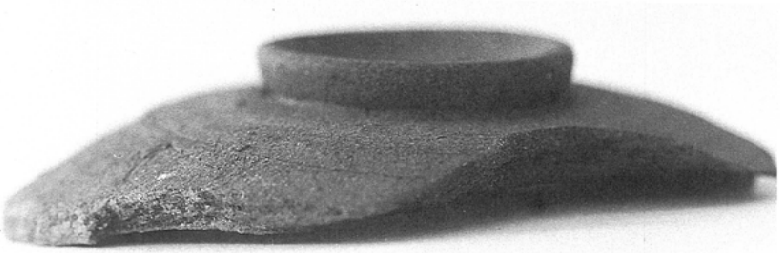
3

試掘調査出土土器(1)

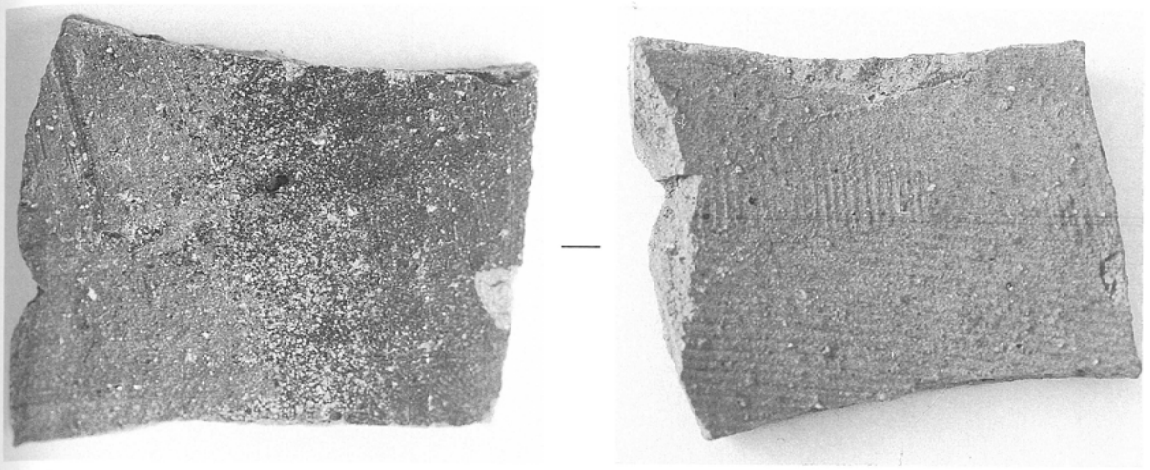
1．須恵器（甕）出土地点A

2．珠洲焼 出土地点E

3．須恵器（高台坏）出土地点I



1



2

3

試掘調査出土土器(2)

1．須恵器（蓋）出土地点②

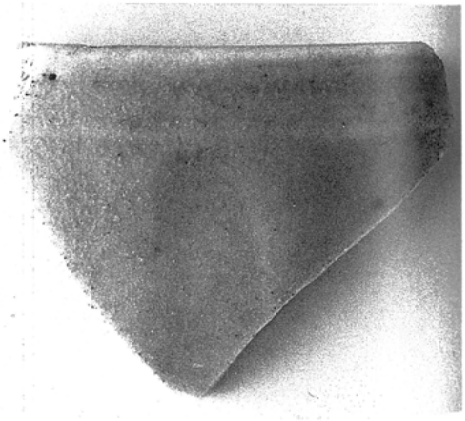
2．須恵器（甕）出土地点⑥

3．土師系土器（坏）出土地点Ｊ'

1

1

2



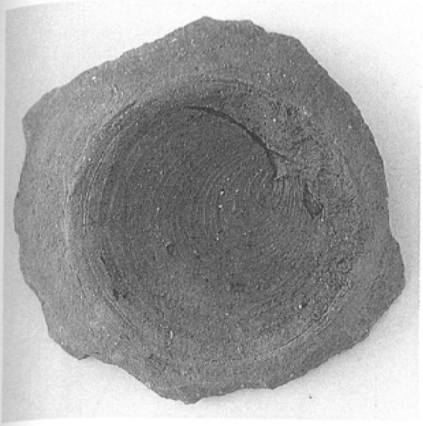
3

試掘調査出土土器(3)

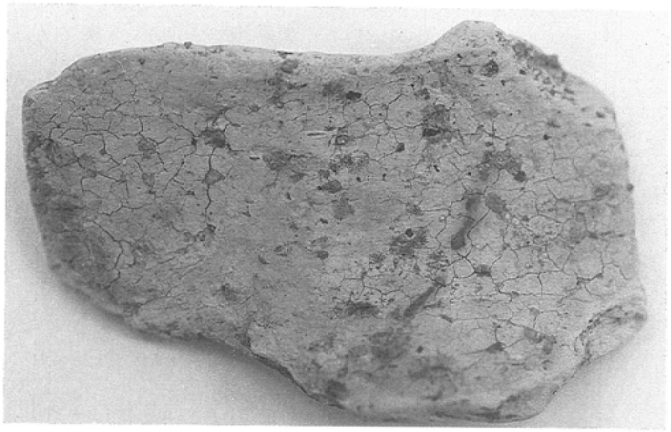
1．須恵器（高台坏墨書土器）出土地点Ｊ′

2．須恵器（高台坏）出土地点Ｋ′

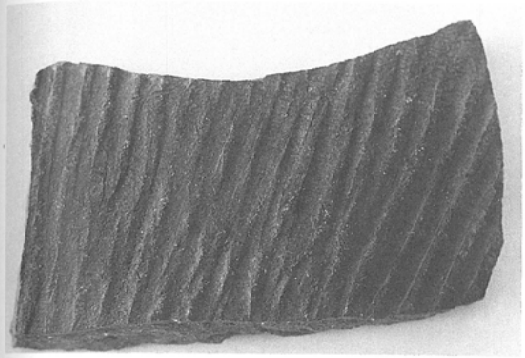
3．青磁 出土地点Ｏ′

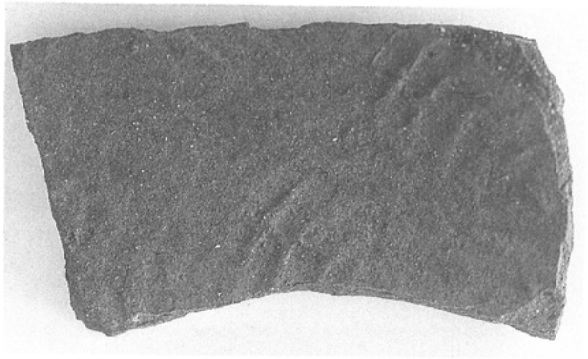


1

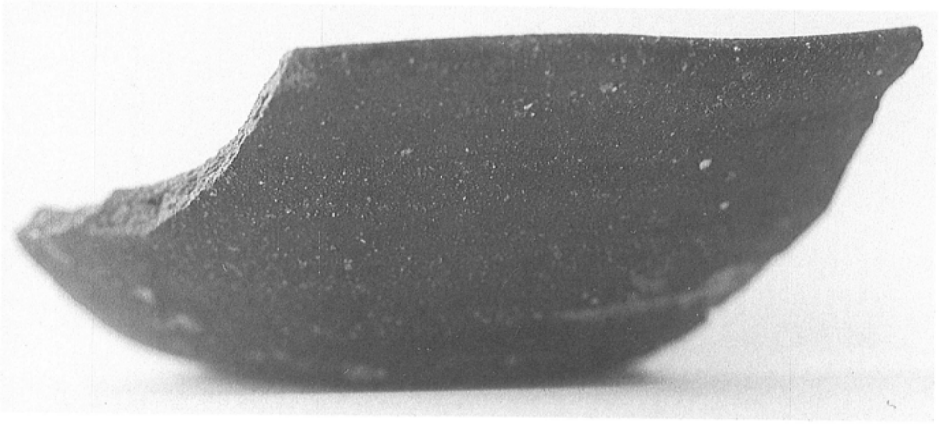


2





3



4

試掘調査出土土器(4)

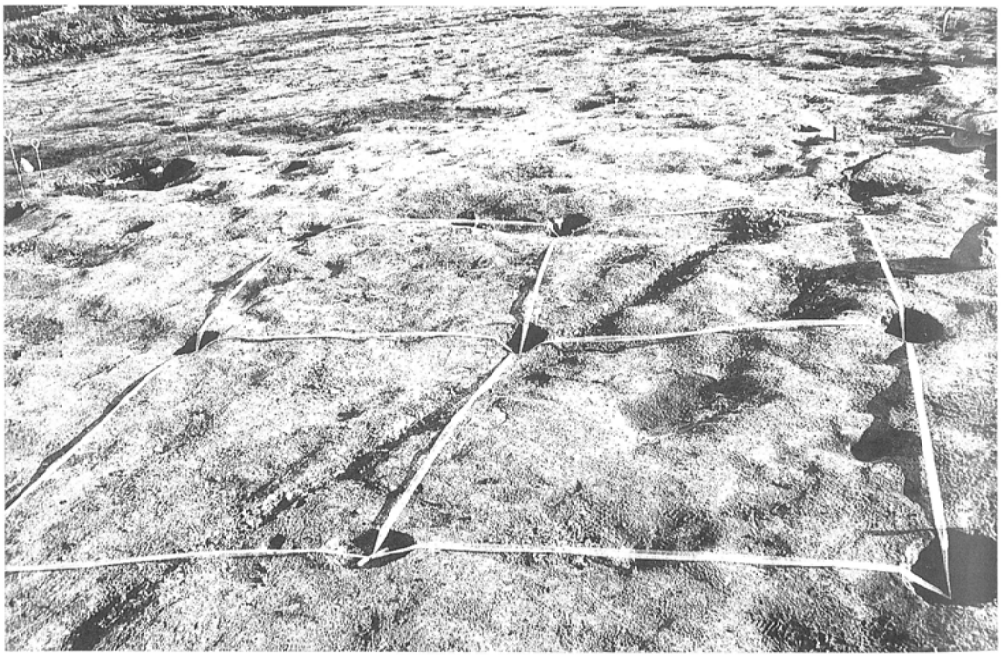
1．須恵器（坏）出土地点⑦

2．土師系土器（甕）出土地点N′

3．須恵器（甕）出土地点U′

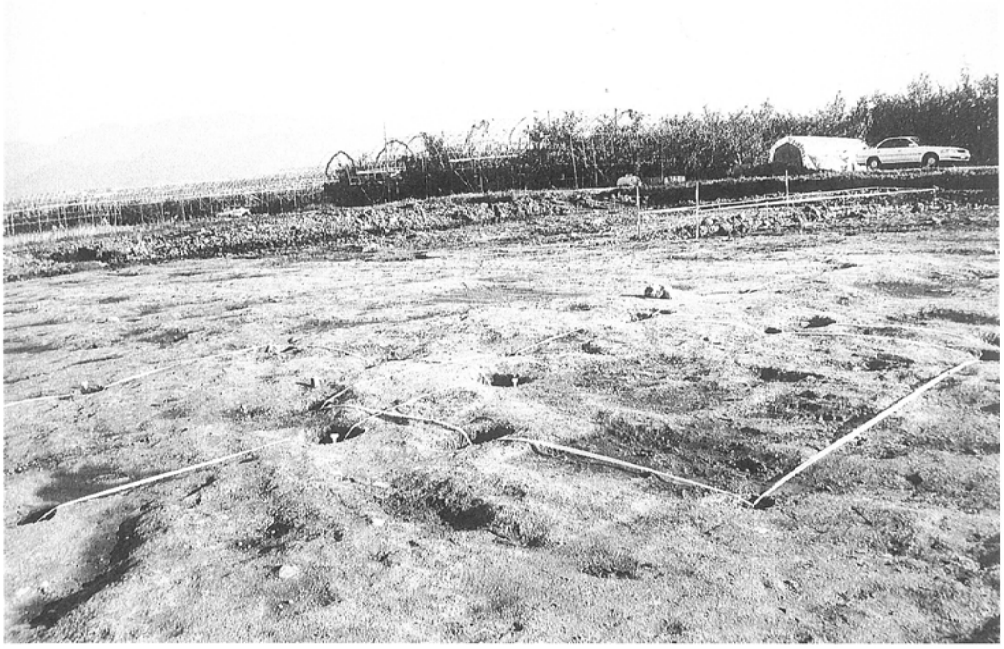
4．須恵器（坏）出土地点 不明

1



2

建　物　跡（1．SB6、2．SB4）

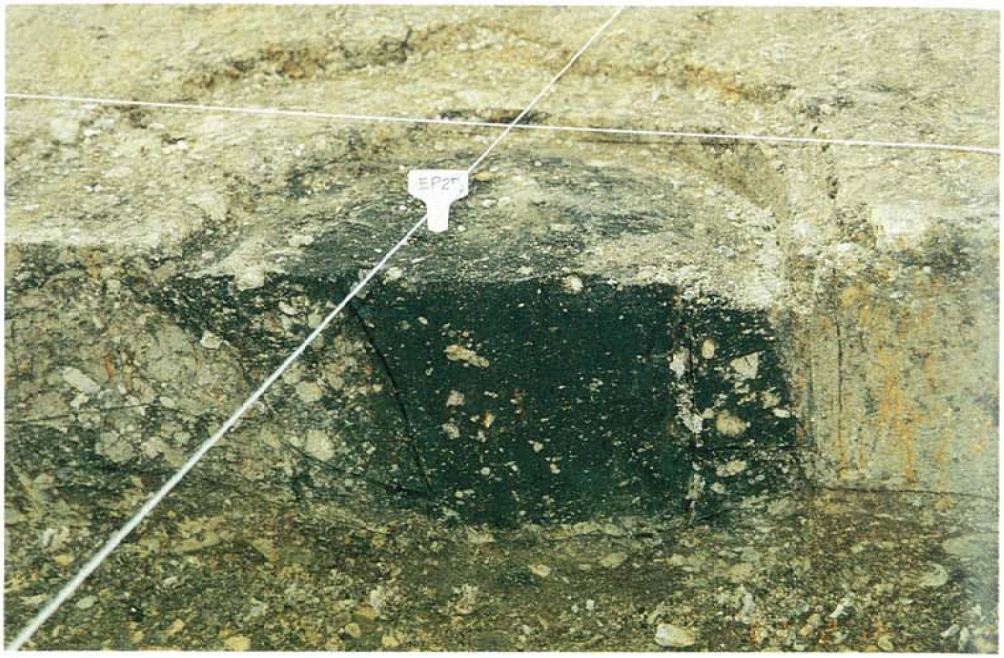


1

2

1．建　物　跡（SB1、SB2、SB3）

2．細長いくぼみ跡（SB3の南側）



1

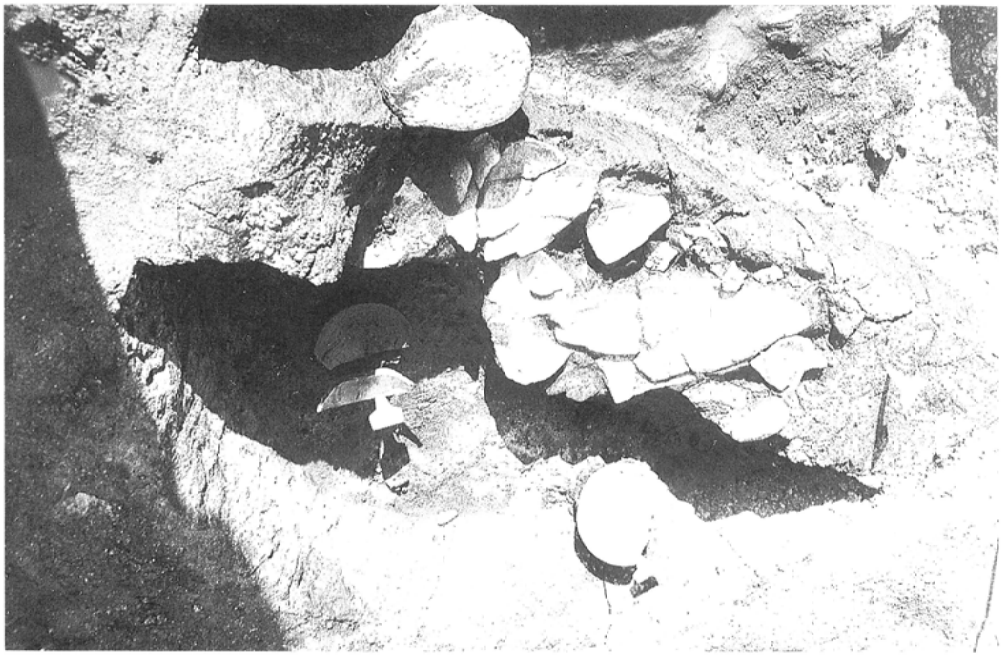
2

掘立柱 柱穴（1．ＳＢ６のＥＢ１柱穴、ＳＢ６のＥＢ２柱穴）

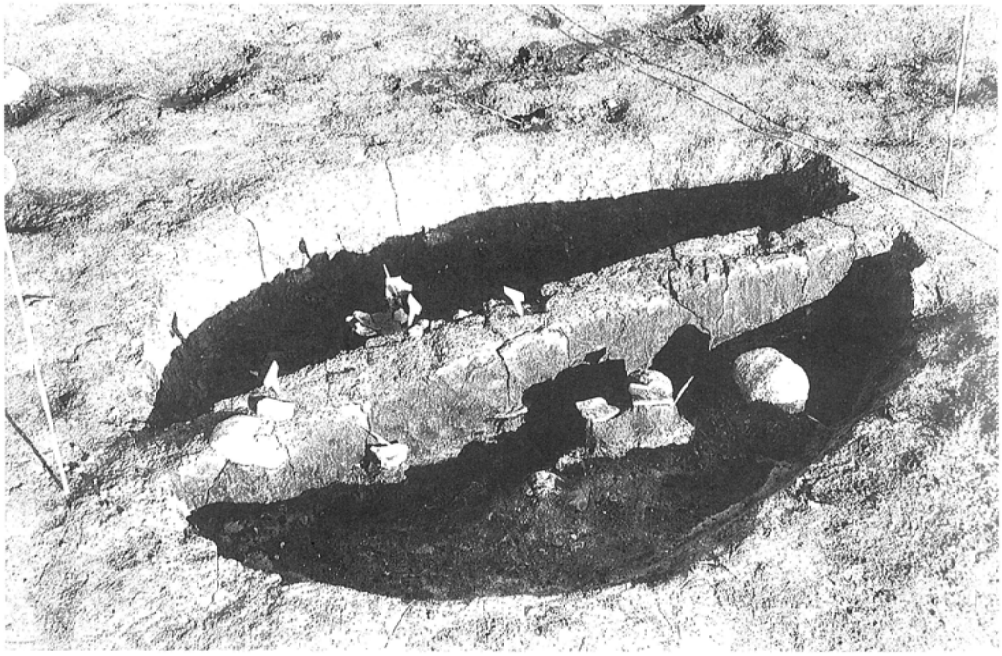
1

2

掘立柱 柱痕（RW1）



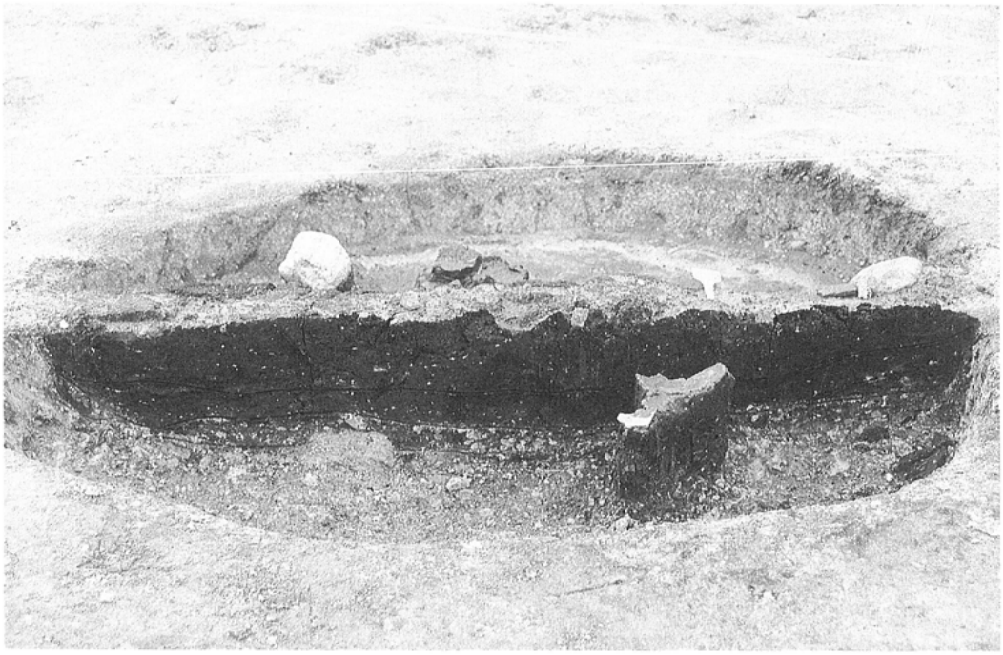
1



2

土　坑（1．SK10、2．SK11）

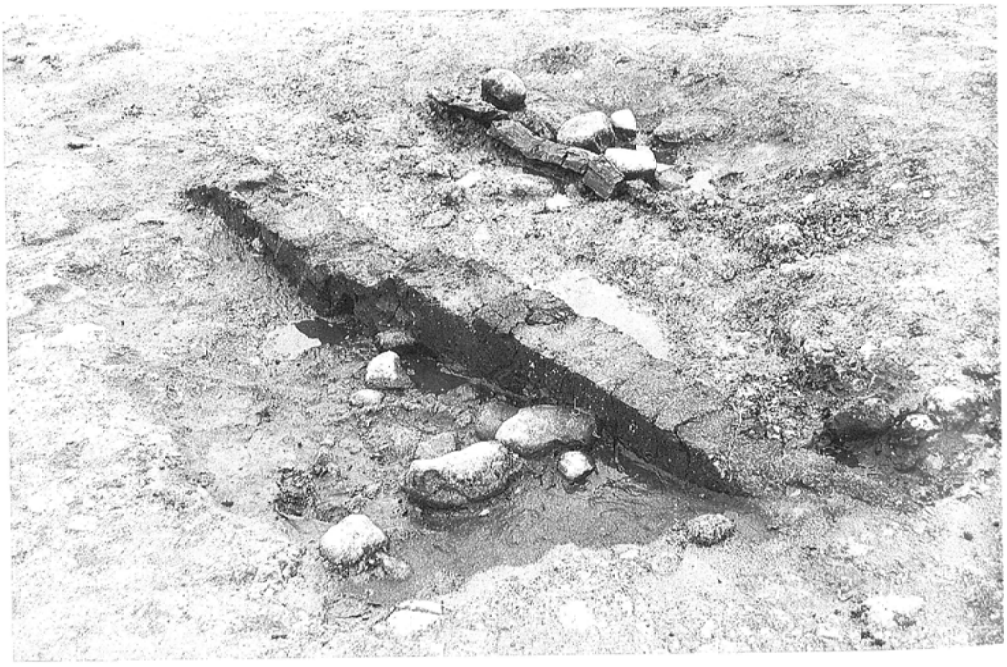
1



2

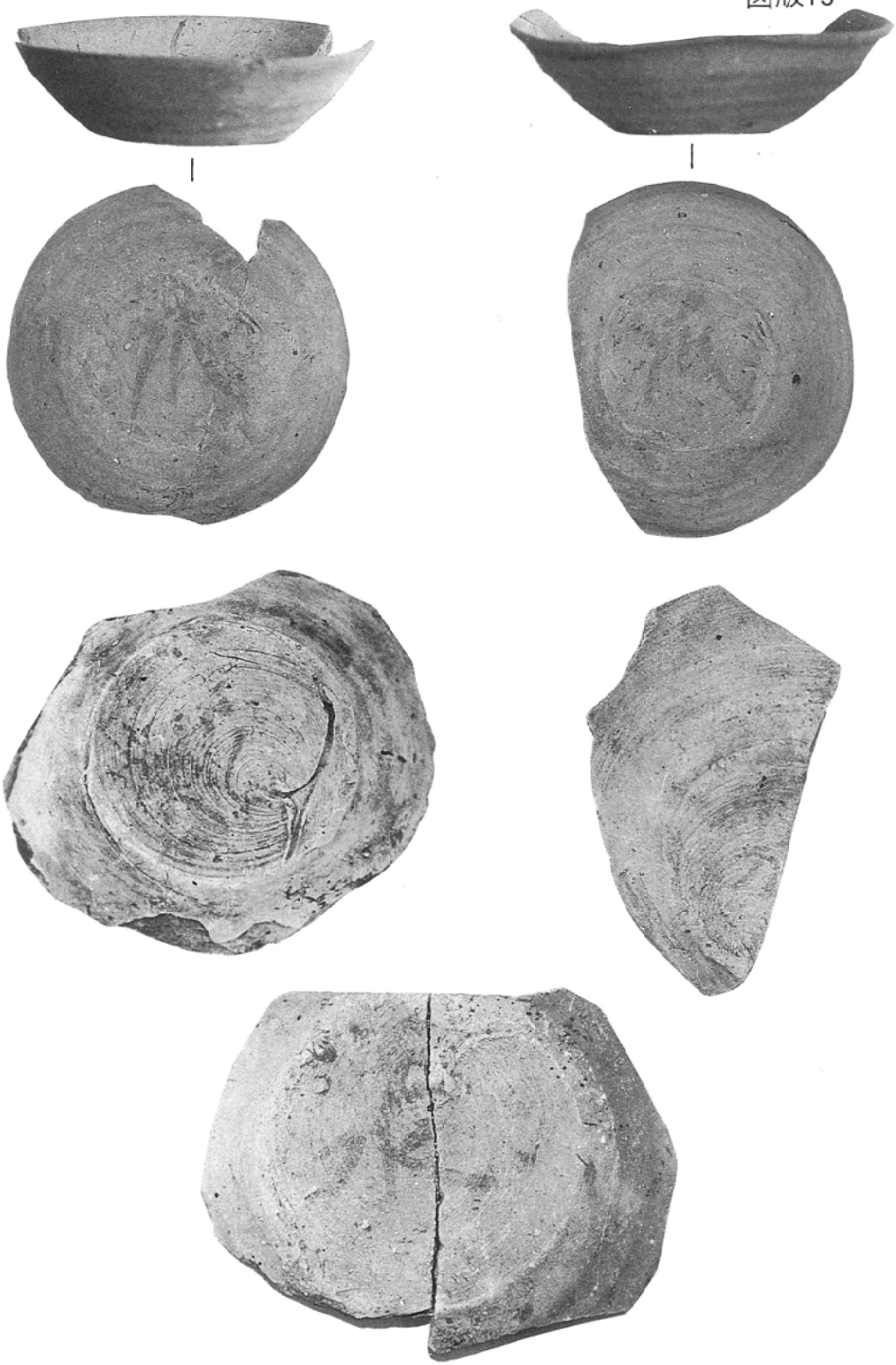
土　坑（1．SK10、SK11、2．SK18）

1



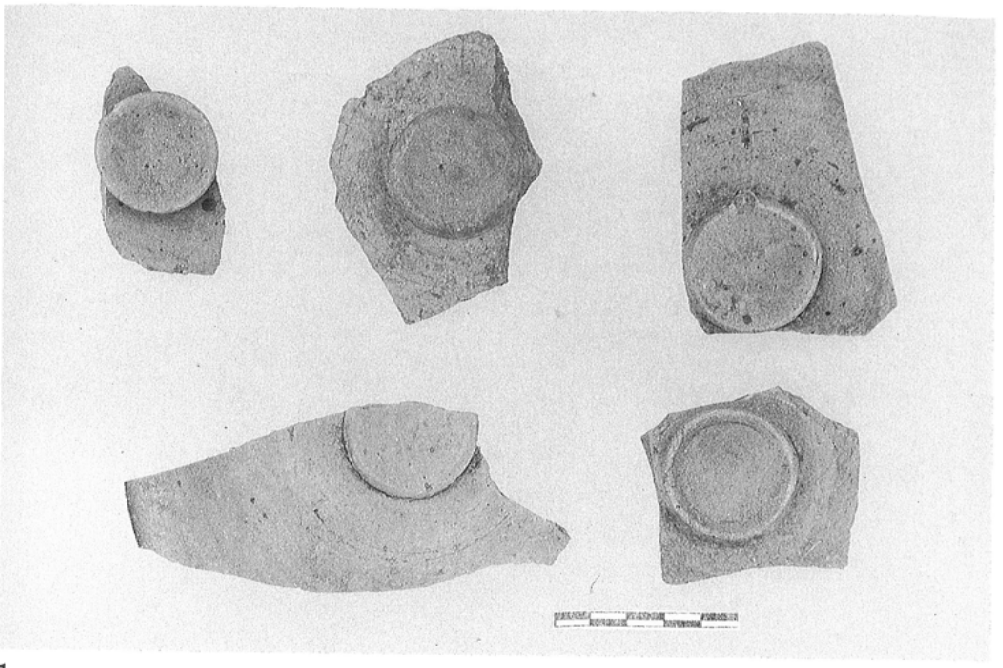
2

土　坑（1．SK15、2．SK8）

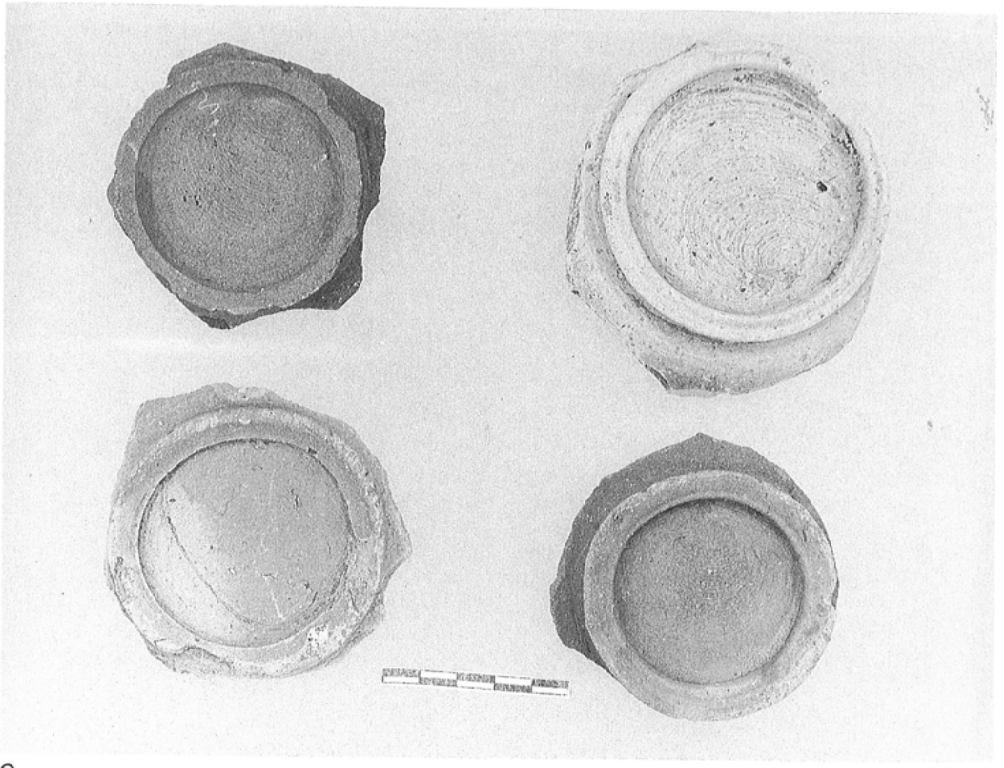


墨書土器

須恵器坏

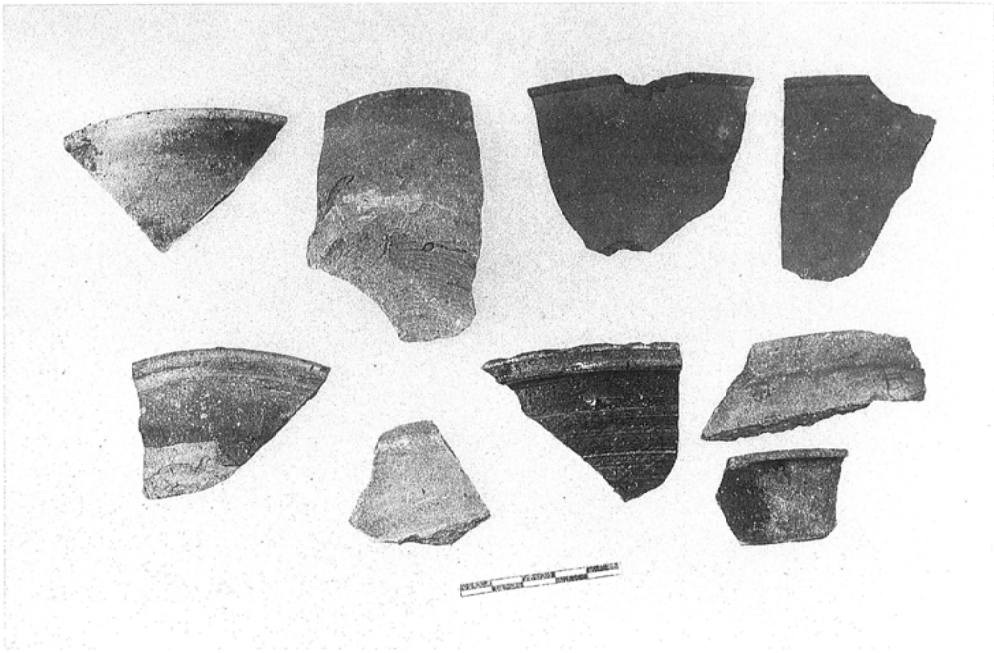


1

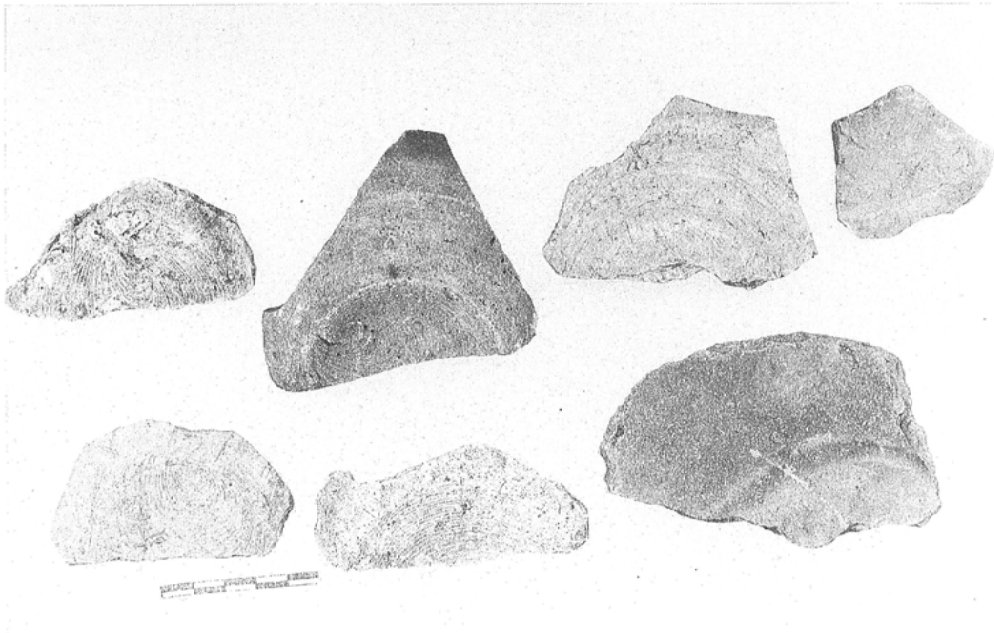


2

須恵器破片 1（1．蓋のつまみ、2．高台付坏底部）

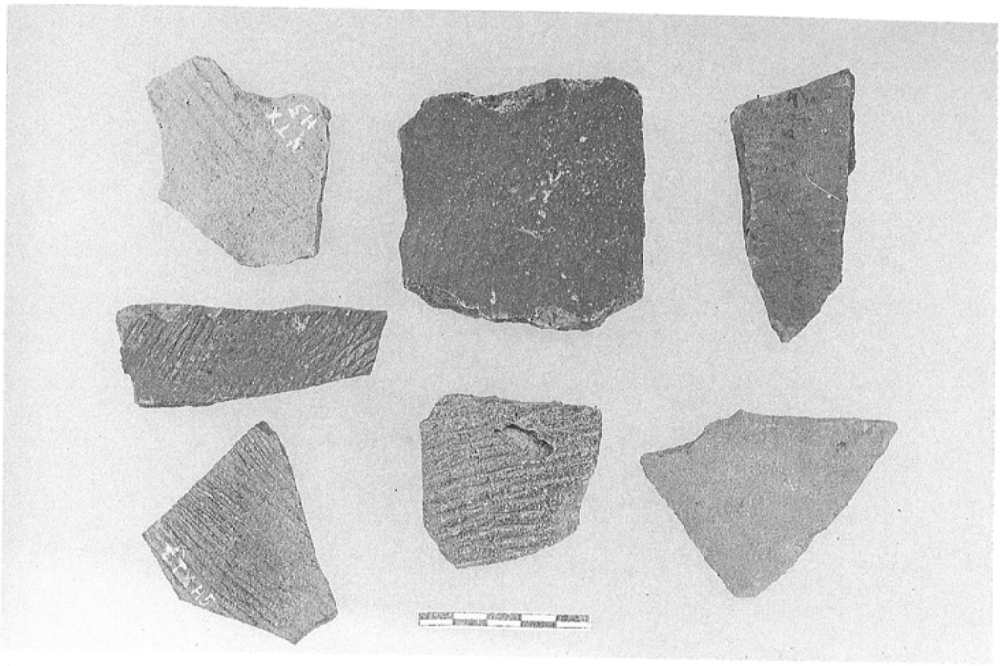


1

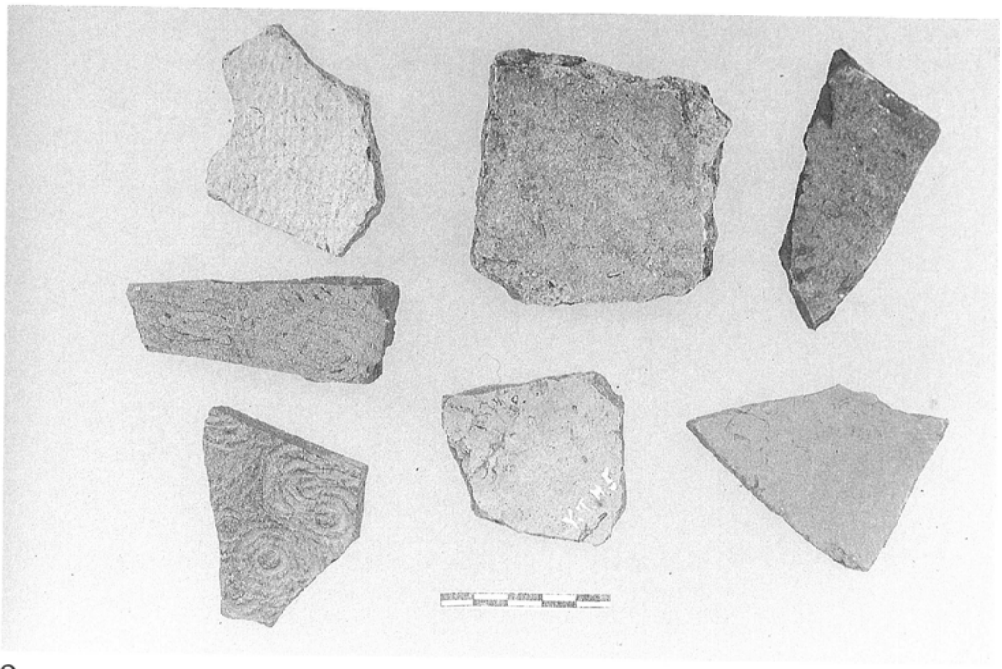


2

須恵器破片　2（1．口縁部、2．底部）



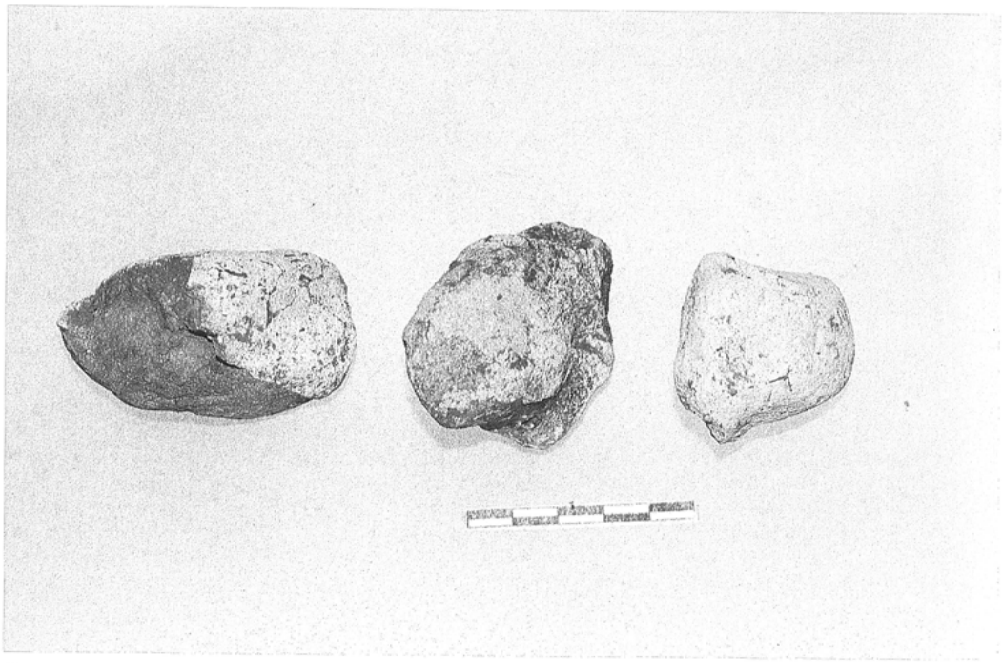
1



2

須恵器甕・壺破片（下は内面）

1



2

土師器系土器　1（1．壺、2．鍋の把手部）